日本紀歌乃解

中

リ5
4887
2

568

日本紀歌解槻乃落葉中巻

皇大神宮權禰宜從四位下荒木田神主久老謹撰

第十一巻　大鷦鷯天皇。仁德天皇。二十四首。

然後大山守皇子毎恨先帝廢之非立。而重有是怨。則謀之曰我殺太子遂登帝位。爰大鷦鷯尊豫聞其謀密告太子備兵令守。時太子設兵待之。大山守皇子不知其備兵獨領數百兵士。夜半發

門 り5 號 4887 巻 2

而行之。會明詣菟道将渡河時。大子服布袍取檝櫓密接度子以載大山守皇子而濟至于河中誂度子蹈船而傾於是大山守皇子墮河而没。更浮流之歌曰。

古事記にも載す。應神の條にあり。

知破椰臂苔　稜威速人也。宇治にかゝる枕詞。所以冠辭考に詳なり。古事記には千波夜振とあり。同じく枕詞なり。

于旋能和多利珥　宇治之渡尓也。山城國。宇治河のわたりなり。

佐烏刀利珥　棹取尓也。釈紀に謂舟檝櫓也といへるごとき。檝を執て船をやる也。今も舟人の云に梶を取るといふ詞是也。

破椰鶏務臂苔辭。将捉人斯也。斯ハ助語。棹を取りて早き人ハ疾く船を進めんと思ひて我を捉まへといへる也。

和餓毛胡珥　吾許處尓也。許處ハ將來也。侍者或ハ左右の人をさしていふ。今ハ許處人也。今ハ其縁者にて毛胡と云へるなり。

虚務。

然伏兵多起不得着岸遂沈而死焉。令求其屍泛於考羅濟時大子視其屍歌之曰。

知破椰臂等。句。于旋能和多利珥。二句。和多利涅珥多弖流。渡手尓所立也。手ハ今の云よ。大子の次の手井の手。大子栖ゐおどりふすまて。その活用をいふ云。所立ハ神代紀に天稚彦門前所殖。多底豊。湯津杜木。云伝と見えて。ここの紀に渡り所殖此云。わたりせを是とせり。渡瀬なるべし。今は菜にもさまよひて立る梓の器

さりとてとあれども、こゝも梓の木、檀の事にもさるをいふと思ほゆれど、古
事記に渡瀬とあれども、同じ瀬にはあらねども、此三つのうち理なきにあらねども、ここも
あらじ。故に考るに、是弓を立ることをいふにや。又此軍人阿豆瑳由瀰
の弓末振起し並立るをいふにやあらむ。八言一句とはいへ
摩由瀰 梓弓檀弓也。まゆみは真弓にて、即梓弓をも真弓といふ。白檀弓とも上に所引の證延喜式にも槻梓
とおもへど、是はまゆみの弓の事にもあるべし。梓弓はまゆみを檀弓ともあれども、まゆみとは檀の木
梓檀とてその名をわかちて、伊知佐加岐ものなり。梓弓をまゆみといふべき理なれど、檀の木にて
こそ弓は造るものなれ。しかるをまゆみを弓といふべき理なれど、檀の木とそへたるにて
まゆみは名を負られば弓とせしなり。伊枳羅牟苔 将射殺そといふ。射斬とも
云ふ所ならば、かく解へるなり。
四に横殺雲巻十二に殺目山 虚々呂破望閉耐 心者雖思也。於
と出れ。假字なれど知るべし。
の所 伊斗羅牟苔 射将取登也。取るの訓なり。虚々呂破望閉耐 を省く。此云
なり。
耐 如上。望苔幣破 本邊者也。弓にも本末あれば、弓の縁語をもてかく
詮。 解へるなり。萬葉集にも梓弓の本末の事あり。

よりても此歌思ふに、万葉巻十三に、三諸者人之守山本辺者馬酔
木花開末辺者椿花咲と同じく、山の麓と頂とをいへるなれど、読の方は同じ
からず。此歌は、かしこくも父尊應神天皇をおもほし
めせるなるべし。されど應神の皇子のよませたまふなり。
望臂湿 君乎思出也。君とは則應神天皇をさしめへるなり。
上より下にかけて云ふ。古事記には此句と次の句脱たり。
破 末辺者也。弓の末のことを解へるなり。上に云ふがごとし。万
葉十二に、梓弓末中一伏三起とも見えたり。伊暮鳥於望
比湿 妹乎思出也。大山守皇子の同母の妹に大原皇女、澇田皇女あり。しま
さむ。彼の女らを悲傷まれんとす。故に、あなたの御心と比較して
まさる妹女の方。此は太子を、伊羅那鶏區 苛無也。なくいはゞかりなく
菟道の妃に思ひまし給へといふ。伊羅那鶏區 いとけなく
ほじく解してつまびらかに、はずかしき事と、悲しく笑
也。苛は病むなり。神武紀の歌に、汝羅の解よりて考へ
比。彼處尔思也。そのやと
は上のみをいはむ。伽那志鶏區 悲哀也。皆曾虚珥於望
は助辞上に。虚々珥

んとおもふ意なれども
こゝもはら意も同じ
べき見ゆべし可考。
○那鶏區の歌ハ助
辭なり。よくよくよふ
いふしけるか上弥能
のおふたなることだに實
のまろもるとよあれ
下詞よりの続きぞ。
まづは着意。

於望臂。此處亦思也。さるところ上の妹をおもふ意也。韋伊枳羅儒紀ハ二句ともに於毛比傳とあり。思出なり。

曾區屢。不射殺曾來也。阿豆瑳由瀰寧由瀰。如上註。御弓の意也。大

山守皇子ハ朝廷傾んとせしの罪あれども射殺んとまではおもほしめさゞりしかど

先帝の愛し給ひし思召且ハ妹の皇女の御せうとにもあれバ射殺さでゆるしても思召が出てよりて

ざりしかバ河に沈めて屍を劍もてつけさせし

しハ今死る人ハ何とおもふならんとよみ給へる也。

十六年秋七月戊寅朔。天皇以宮人桑田玖賀媛。示近習舍人等曰。朕欲愛是婦女。苦皇后之妬。不能合以經多年。何徒棄其盛年乎。即歌曰。

○漁人の鰹魚を鈷ふハ
鯆。漁魚の類なり。
その故皆多の肉あれ
ハ志毘の名やおびら
かんとし大魚と云も
と称する名を
告るなり。

瀰儺曾虚赴。水底經也。經とハ從ふ也。万葉集巻十六に。為支屋所經稲寸丁女と有も。醜屋に住稲搗少女といふ意也。これも瀰儺曾虚といへる也。又の云にて古事記雄略の條に。美那曾曾久淤美能袁登賣はかくもあれ。郡縣ふるまでに宮中の朝もらへとあるも。なぞらへて淤美能烏登賣といへるをひしと経ると志毘ハ大魚ひかりのかくなるゆへハめぐり水にそひしてまはりて此魚はとハ同じく息長鳥と水長鳥とひとつ音をもちてさかれたる由縁あるなれバ武烈紀の影媛の御れ歌にも志毘能和倶吾塢とあるをこれ也。古事記にハ意布袁余志
しかして志毘の名とつゝけるべし。かつおとふ子良。経考るに古事記の何ゆゑ大魚と云まで。今も鮪の不類をも大魚といふ
斯毘都久阿麻とあるを大魚よ鮪と詔へる云まで。今も鮪の不類を大魚とい
ふ。鮪の数のこし大魚と何れも多くあれバよく鮪の数のこし。大
鮪の名をおびしといへり。是を古事記にハ異なる名の類なるべし。おほいさめ
志毘を思ひて志毘をもあしく。名ハ同音や同じ魚を多肉
とよみて既に神武紀のおほみこ。文によりて大魚遠ハ多肉魚なるべし。美肉の約
人のまに称るの皆志毘の多しく経る。これぞ志毘能意布袁余志
牟年なるをに常よく書かれ。されバ多肉魚よ鮪肉と称する名はおほかれど
牟都を同数の例也。さる経るまで志毘とも経見とハ同意の云なる
さらへ経跡も多肉の意につけたるまで志毘を経の云なる
あらめ故みなそくみなられて皆れ経験をも紫しせさるとやあるべし。

〇近ごろ流行る書にも解 臣女の二字を誤りて 論へる說もあれど 臣女の二字 ...

〇再按に速待といふ名も ... 待るとふ意 ...

於瀰能烏苦咩烏。臣之孃子乎也。臣ハ官人をいふ称也。武烈紀の歌に飫瀰能古。万葉巻三に臣乃壮士。巻四に臣女なども見ゆ。

多例椰始灘播務。誰将養也。たれがやしなはむ

彼巻にも解侍るべし。撫育むこと也。

於是播磨國造祖速待。獨進之歌曰。

瀰箇始報。厳汲也。美加しと伊加と通ふ例ハ武甕槌神を武雷神ともいへり。播磨國ハ汐の流れの速き所なれば速待の名あり。

破利摩破椰磨智。播磨速待也。速待ハ人の名也。

以播區椰輸。岩崩也。岩ほも崩るるが如き厳汲といふ意。万葉巻十四に可麻久良乃美胡之能佐吉能伊波久叡乃などあり。

加之古倶等望。雖恐懼也。

阿例椰始儺

破務。我将養也。

即日以玖賀媛賜速待。

二十二年春正月。天皇語皇后曰。納八田皇女将為妃。時皇后不聽。爰天皇歌以乞於皇后曰。

于磨臂苔能。淑人之也。上神功紀にも見えたり。

多菟屢虚等太豆。所立言立也。皇后の立すまじきを立るといふ意。万葉巻十八に大伴佐伯氏者人祖乃立流辞立云云。又世之人能多都流許登太弖云云とも見えたり。漢籍論語に夫仁者己欲立而立人とも見えたり。

于瑳由豆流。設弦也。神功紀に令曰各儲弦蔵髪中。古事記仲哀條曰爾自

頂髪中採出設弦。由豆流。蔵弓弦の略讀なりと。**多曳磨菟餓**

次の句をいひおこす料の発語なり。**奈羅陪豆毛餓望**

務珥。絶間将継介也。皇后みづからも...

並而毛冀也。皇后のならべてもといふ意ならむかし。

万葉に欲得とも欲ともとも冀ともかきたるもこのかもなり。

皇后答歌曰、

虚呂望虚曾 衣己曽也。こそは助辭なり。衣の襲ねたるをいふ。**赴多幣茂豫**

耆。二重毛宜也。上なるをそへていひて、かく夜床におもひよせたるなり。**瑳用廼虚烏**

小夜の床をいへり。万葉集に小夜床と荒良年巻十八にあり。**那羅倍務**

夜床かたさりもして今宵は繁にもあるかなりの事なるべし。所の床なり。小夜床乎也寝。

耆瀰破。将並君者也。皇后と八田皇女と夜床をならべなむはかしこき君なりといふ意なり。**箇志古耆呂箇**

茂。恐呂哉也。もは助辭。万葉にはあるをも。二人の歌をならべたまはんとすればよくもあらぬおもしろき事なり。

天皇又歌曰、

於辭豆屢 押照也。和庭とかける発語のうちに万葉集巻三の歌にもおしてるといふ語ありといへども押照にも忍照にも臨照にもあてたり。**那珥破能瑳耆能**

今も難波の辺よりいふを津の国のおしてるといへり。**那羅弭破莽** 並濱也。難波の濱の名と知られたり。此古図をみるに西の浜に**那羅陪務苔虚層** 将並登己也。とてあそびといふなるべし。

曾能古破阿利鶏梅。 彼兒者将在也。その兒とは八田皇女をいふなり。

○此古図といふは摂河[illegible]院の[illegible]いふ人の疑しきの崎之也。難波之崎之也。[illegible]

なるは吾なるべきなむとこそ。その児をおもひて首なり。といふ言なるべし。
その児といふぞ。吾なるがるなれど。おもひて首なるものいふ言をハ末句なり。

皇后答歌曰。

那莵務始能。夏虫乃也。この夏虫を蠶といふ。和名抄ニ云。玉篇云。蠶音元。和名奈都古。晩蠶也とみえたるを。

始能虚呂望。蠶乃衣也。和名抄ニ云。文字集略ニ云。蠶也。今按即是蛾蚍之虫。和名比々流。

璽内老蠶也とみえたるも。この蠶ハひと苦しりなる取きを。

武藏國秩父郡のあたりなるに。彼國人蠶の繭なるをとれるをハ。ほれりきといひ。その蝶

化したるを比々流といひ。又比流ともいふなり。臂務始ハこの比流虫なるべし。この

流ものなりて。下り

いふを待べし。赴多弊着豆。二重着而也。この衣ハ。ほれりきとの

二重なるといふなるべし。上なる流をふさへたるよきとみえなれる繭も。彼比々流の鏡と

よみまさる綾今ハそれもよりかなぬよりも綾ちなるべし。説くるや。箇區瀰

夜儾利破。園弥足者也。園ハ即蠶の繭といひ。その内に

蜆と見ゆる取を弥足とハいへるなるべし。阿珥

豫區望阿羅孺。豈能毛不有也。何の事もなし。夏のはなるより何のよきなりある

やとのふるかなかへるときハ。夏虫といふなるに。あそてかさなりて衣二重を

皇后と八田皇女とをならべあわむるとよし。といふなり。

天皇又歌曰。

阿佐豆磨能。朝妻乃也。大和國葛上郡の地名也。姓氏録ニ大和朝津

間腋上地とみえ。万葉巻十ニ大和國の地名をよめるも

あり。今朝去而明日者來牟等云子鹿丹且妻山介霞霏。子等台丹剛之宜

朝妻之山木之介霞多奈引と見えたり。録中が考ニ云。天武紀ニ云。九年九月癸

酉朝辛巳幸于朝嬬以看大山位以下之馬於長柄杜云云。古事記ニ云。葛城長江曽

都毘古云云。延喜式ニ云。葛上郡長柄神社。右は姿を此ほしとて長柄長江を同じき

を知べし。武紀の朝嬬も葛上郡なるを知べし。宮居を葛城なるに此ありし

よりと知らせなる地なれバ。あいよる縁のあるといふ也。その説あまたな

箇能烏瑳箇烏。避介之小坂也。避介ハ地名なりといふ也。飛鳥あるは
おとつまてなる。地名と中の也ひろくハ。ひの

〇流波の長柄もなどの
ことよりいふ。なきことふ
このしかこその夫なり。
流波の語也考へし。
論におけり。

さゞめし船ど係蹲まてをとりかへして朝妻山の片山岸なるをいへる名を記べし
清るを上とり万葉集を見て知るべし。下の島ハ與ゞ島て小坂とも呼
うける 箇多那耆珥 片無亦也朝妻山の片山岸なるを利〔?〕さなき
なり。 なとといひつゝ云をなすものかさなきとハ
れ手なきさみといへるむかし敵もおのとりなるを按べし皇后のおもはる
くらべむとりおもふむすてなかりしきしむすそと詠へるさまにて片寄きの下
み皇女をゆるしたまハぬハおかしさ情ぞ 瀰致喩區茂能茂
とらふ言をふくめまへるえよししてしそ。
道行者 多愚譬苴豫枳 偶而曾善也九の為りくさへも修
毛也。 いとりけんよりまて。おもはありて副
りぞとまさにとりふ言なるも万葉巻四に草枕羇行君乎愛見
副而曾来四鹿乃濱邊乎 とあるふハ相添ふ意なるを思て知べし。
皇后遂謂不聽故默之而不答言
三十年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行
紀伊國到熊野岬即取其処之御綱葉而
還於是日天皇伺皇后不在而娶八田
皇女納於宮中時皇后到難波濟聞天
皇合八田皇女而大恨之則其所採御
綱葉投於海而不著岸故時人號散葉
之海曰葉濟也爰天皇不知皇后忿不
著岸親幸大津待皇后之船而歌曰
那珥波譬苔 難波人也万葉巻十一ニ難波人芦火燎屋之云云都人
或ハ須广人なとゝいふ類にて人とハ己を彼をいふし

てふ云ふなるを。近世古學の徒。自称して某國人とかいへるをやめおかる。

須儒赴泥苔羅齊、鈴舟令執

也。鈴船ハ官船にして。鈴ハ駅鈴の類なるべし。執て 許辭那豆瀰 腰悩也なり

綱にとりて取をとりふるハせハ。そを執と下紀にする云や。つむハ古事記景行の條に。阿佐士怒波良許斯那豆牟。万葉巻十三に。夏草乎腰尓莫積云云。巻十九に。落雪乎腰尓奈都美氐云云。このなづむハそこと中に入りて。あるく云ふ意をいへる語なり。上代那豆未の下にうつる那豆佐布れなるづの同じ意れへしける。なつむハ小竹原にも夏草にも雪にも縁まで踏入るをといふべく。経なづむといふなるべし。今ハ悩の意とのみなれど。古くハ広し。

於明瀰赴泥苔禮 大御船所執也。皇后の乗まる官船なるを。鈴船とハ詠へるなり。 曾能赴尼苔羅齊也。そのと其鈴令執ハ。鈴船を悩のさまをもてなれば。きこう延しおかハ。さるせもし。

時皇后不泊于大津更引之泝江自山背廻而向倭明日天皇遣舎人鳥山令還皇后乃歌之曰。古事記ハ。このあとの次にの紀と。あるきいもつかハして考えよ。

夜莽之呂珥。山背尓也國のあひ乗の次のあまにいへども。山城の字におなじ。伊辭鷄 伊及鳥山也。伊ハ発語。及ハ神代紀に及之共語と見え。万葉にも。及のうみをまつとさくるも。今ハ皇后の御もとへ追及する意なり。

苔利夜莽。まも。及のうみをまつとさくるも。今ハ皇后の方へ。

伊辭鷄之鶏 伊及之也。古事記にて伊斯祁伊斯祁と。ありてもいとおしめあハんとし。同じ云ぞ。

とりふるしきの鳥山ハ。舎人の名なり。

阿餓茂赴莵磨珥 吾思妻尓也。於ハ省く。ハ直言の名なり。

いやまなよしといへるのうちの詞にて今の云に。かかる数あまたし。

伊辭枳阿波 古事記ハ阿餓波斯豆摩迩とあり。我愛妻にや。万葉にも。

牟伽茂 伊及將遇哉也。なにごとも既に上るか。

発井に波之伎都麻良波。皇后に遇なまゝしの御旨也。

皇后不還猶行之至山背河而歌曰。古事記云。

○上の使ハ。ちなききちヤタガラス鳥をそれがめすがたをありても使とせる。且ぞ古事記には。萬葉にも王孫の我に舎人の名なり。いさかへしもかるの詞。鳥山ハ山城への使も。かゝる名あかし。こゝ多がし。

○ちつ山背河ハ今の淀川。木津川の今

て流れる大川をいふ。堀江ハ難波のあたり。大和川と今いふ所なる。[illegible]の考。難波の[illegible]一冊あり。[illegible]てみるべし。

○[illegible]紀ハつぎねふ[illegible]庭と[illegible]の一云[illegible]なり。

○[illegible]にも同本紀の[illegible]を作りたるも家庭[illegible]ハ荒草竹除而立伐掃へ其の地を開く[illegible]

即不入坐宮。而引遊其御船。泝於堀江。隨河而上。幸山代。此時歌曰。云云。

菟藝泥赴。續丹生也。[illegible]とりふ。[illegible]白土を[illegible]連續の意。丹ハ土[illegible]。万葉巻十一に淺茅原と[illegible]山背[illegible]ハ。家庭代。[illegible]應神の大[illegible]庭也。[illegible]苗代綱代の代[illegible]既に上[illegible]

椰莽之呂餓波烏。山背河乎也。[illegible]

箇破能朋利。河泝流。[illegible]

餓能朋例磨。我泝者也。

箇波區莽珥。河隈尓也。[illegible]

多知瑳介喩屢。立榮也。万葉巻七[illegible]開木代之來背社

ハげしきことをいへり。

草勿手折。已時立雖榮草勿手折。古事記ハ波毛々多羅孺。百不足也。斐陁豆流佐斯支ともなりし。以下甚異之。下云云。

毛々多羅孺。百不足也。八十[illegible]

椰素麼能。[illegible]神代紀に。百不足八十隈路尓云云。[illegible]

紀破。八枛棱木者也。[illegible]斐陁弖流佐斯支[illegible]佐斯支能紀斯賀斯多[illegible]由都婆都婆岐斯賀波奈能氐理伊麻斯斯賀波能比呂理伊麻須波[illegible]

於朋耆彌呂伽茂。大王呂哉也。[illegible]

即越那羅山。望葛城歌之曰。古事記云。即自山代迴到坐那良山口歌曰云。

莵藝泥赴。古事記に赴の下に夜の字あり。椰莽之呂餓波烏。註。如上。瀰椰能朋利。水豚泝也。みなとハ今船人の云よ。みなといふなり。すめらやハ道子

寿なれハ。みやことも云なるべし。神代紀に。青橿城尊を吾屋橿城尊とも申し。八郎やと。和餓能朋例麼。註。如上。阿烏珥豫

をとこ道ふ俗なり。

辭。姸哉也。奈良ハ愛しきの字にて云也。神代紀に。姸哉可愛少男と云々。姸哉。此云阿那而恵夜と有る阿那ハ。夜斯ハ助辭。愛彼八師。繼恵八師などいへる八師やにて。その阿那と。阿夜とかよひ。八師と與師ときこえよ通ふよし。古事記三の記よ見えたり。儺羅烏輸疑。奈良乎過也。烏陁弖。小楯也。私記云。倭國之山。如立小楯也といふ

よ叙事し云る句よし。古事記のまゝ。小楯ハ添ふ也。楯並就青垣山と。師の冠辭考にある夜麻の二字加へ来り。夜莽苔烏輸疑。倭乎過也。耶麻登ハ山門

那なる。やまとの郷をいふと。師云へる。耶麻登の國とも。家庭所の名なるよしを。古事記三の記よ見えたり。山跡の名。可併攷。和餓

瀰餓朋辭區珥波。我見之欲國者也。万葉に見欲之見欲之なども出たるハ。假字にて見まほし。說するをいふ云也。和餓の二字ハ。上の輸疑の下に属べきなれバ。又下の區珥波三言。一句とすべし。宮處が五言七言にかぎるよせむもいかゞあれバ。是ハ九言一句とすべし。しいへるを。古風の歌よてあるめれバ。そのまゝにおくなり。箇豆羅紀多伽瀰椰。葛城高宮也。和名抄。葛上郡。高多加美也 土佐國風土記に。葛城山東下。高宮岡。釈日本紀所引。この皇后ハ葛木之曽都毘古之女にあられバ。葛城高宮ハ皇后の本郷也。故に深く懐にあひ給ひまつりしかバ。ほしと思ふハ。のちへゆやく。近くハ本郷をいふにあらで。万葉巻三の解よ。くハしく伝たる。又按よ。この國ハ春日國。泊瀬國の國なとて。即葛城をさして。謌

へるとも。和藝幣能阿多利。我家之邊也。此ぎへハ。既よ景行紀乃歌よ出。古事記履中條の大御歌よ。

波迩布邪迦和賀多知美禮婆迦藝漏肥能毛由流伊幣牟良都麻賀伊幣能阿多理。と見えたるを。いふべし。

更還山背興宮室於筒城岡南而居之。

冬十月甲申朔。遣的臣祖口持臣喚皇后。爰口持臣至筒城宮。雖謁皇后而默之不答。時口持臣沾雪雨。以經日夜。伏于皇后殿前而不避。於是口持臣之妹國依媛。仕于皇后。適是時侍皇后之側。見其兄沾雨而流涕之歌曰。

椰莽辭呂能。山背之也。莵々紀能弥椰珥。筒城之宮尓也。筒城ハ今の綴喜郡也。むかしのつゞきといふ名も。上の莵藝泥布のつぎ藝なり。おぼゆるなり。

茂能莽烏輸。物啓也。萬葉巻十六に。石麻呂尓吾物申云云。萬葉集に。ものまうさくといへる人のものまうすなり。云云。こゝは皇后に請謁也。この臣。よくこの申すことを。口持の名は直にいふなり。

和餓齊烏瀰例麼。我兄乎見者也。口持臣と古事記には阿賀勢とあり。

能岐美波。

那弥多愚摩辭茂。涙催之毛也。なみだぐましとは。涙催すこと。上やくもの歌にいへり。あはれのこゝろの細きをいふなり。

○齊ハ。男子をさしていふ称。妻より夫を称し。妹より兄を称し。又男どち互に背とも。既上にもいへり。

時皇后謂國依媛曰。何爾泣之。對言。今伏庭請謁者。妾兄也。沾雨不避。猶伏將謁。是以泣悲耳。時皇后謂之曰。告汝兄。令速還。吾遂不返焉。口持則返之復奏。

于天皇。

十一月甲寅朔。庚申。天皇浮江幸山背

時。桑枝沿水而流之。天皇視桑枝歌之

曰。

菟怒瑳破赴。蘿佐延也。岩にかゝれる發語也。師説に云。古へハ角綱蘿を。おもひかねて。蘿を都奈とも都奴とも云といへるによりて。瑳破赴の瑳ハ佐夜小男鹿などいふ佐にて助語とすべきにや。又さ多延の約言なるもやあらむ。師も怒瑳の約多なれバ都多波布の延言といへれし。程師の冠辞考に詳也。併せ見るべし。

以破能臂謎餓。皇后の御名。石之姫之也。

飫朋呂伽耳。凡加尓也。万葉集巻六に。大夫去跡云道曾凡可尓念而行勿。巻廿に。安多良之伎吉用伎曽乃名曽於煩呂加尓己許呂於母比弖。云云。後の期に。おぼろけといへるに同じ。

枳許瑳怒。不会聴也。古事記仁徳條の歌に意富伎弥斯與斯登岐許佐婆。万葉巻十一に不知二五寸許須。巻十三に毋寸許勢友。巻廿に可久志伎許佐婆宣給バといふ意をおぼしてすなはちきこさばといふ事をおぼさぬに。きこさずしてひとりたゝせ給ふといふを。おぼすよしなき事にかゝへ給へる事をいふなり。ゆるしかねるといふ也。

于羅愚破能紀。末桑之木也。うらくはハ末を十に哀しみて。万葉集巻八に末葉巻十に末若葉も見えたり。うらといふ事いと多し。その末葉なる心強きといふ意也。かくしてもおぼろけにゆるし給はぬとうらめしきをいふ意也。とりてかの万葉巻一に浦佐備豆。巻二浦不樂晩。巻十四宇良毛登奈久毛。などもあるにあるをもあれど。今も俚言によろしからぬ事をうらめしといふに同じ。皇后の心強きに。ふたゝびおぼし給ふ意也。

豫屢麻志枳。不可依也。

箇破能區莽愚莽。河之隈々也。今の俚言にかはのくまぐまと云ハ上にもいふ意也。

豫呂朋譬喩玖伽茂。従倚行哉也。従倚ハ。今の言によく似たり。といへるに同じ。皇后のゆるし給はぬを御自行幸しますに。御身の比ますと桑の枝のよるべなく流れゆくに。詠せさせ給へる也。

明日乗輿詣于筒城宮喚皇后皇后不参見時天皇歌曰。古事記云。口子臣。亦其妹口比賣。及奴理能美三人議而令奏天皇云。云云。尓天皇御立其大后所坐殿戸歌曰。とあり。

菟藝泥赴 註。如上。椰摩之呂謎能。山背女之也河内女倭女 ちがひ続る類多し。

許久波茂知。小鍬持也。小ハ大小の小の意なり。又呂派云そし小田の小なる同じきなり。くハえ、土を崩ちの意なる名なるべし。ハ其双の

于智辭於朋泥。打之蘿蔔也。打とハ今も畠を打田を打ハなり。鍬打なれば [illegible] 蘿蔔ハその根なれ大なるなれ名なり。大根と字を書くハ [illegible] べし。

佐和佐和珥。騒々尓也。ハ鍬ハて畠を打音なり。それをも [illegible] 屋の [illegible] 騒しく [illegible] 万葉巻一ニ散和久御民巻五ニ佐和久子等 [illegible] 今の [illegible] 佐わく [illegible] その騒ぐ

○そどろ。起りなりとも [illegible] かぐ [illegible] のきるものなり [illegible] 宮せ [illegible]

[illegible] の音よ [illegible] 須なるべし。

儺我伊弊劒虚曾 汝言者也 [illegible] 言の [illegible] 也。継體紀の歌に倭我弥細麼とあり。今も [illegible] 詠

于知和多須 打渡也。万葉巻四ニ打渡竹田之原。 [illegible]

耶餓波曳儺須 [illegible] 彌木生成也。耶ハ今ハ木那と [illegible] 紀の歌に [illegible] 耶の字 [illegible] 延喜式祝詞に八桑枝とある [illegible] 倶も餓も呉の濁音

[illegible] 茂も [illegible] 尾張 [illegible] 生茂 [illegible] 宮居の騒しく [illegible] 御門 [illegible] 參來れ [illegible]

企以利摩韋區例 來入參來也。万葉巻廿ニ安禮波麻為許牟佛足石の歌に和禮毛麻韋弖牟とあり。

紀ハ [illegible] 此天皇與大后所歌六歌皆志都歌之返歌也とあり。

亦歌曰。

莵藝泥赴。句。夜莽之呂謎能。句。許玖波茂知。句。于知辭於朋泥。以上四句如上註。泥士漏能。根白之也。蘿蔔の根の白きを宮居の御かいなの白きにたとへて次の句へつゞけたり。辭漏多娜武枳。白臂也。和名抄に陸詞切韻曰。腕臂也。和名太々無岐。一云宇天。手腕也。新撰字鏡に臂太々年伎とありて向股の名に入るをもて左右の御手の向ふを臂といふなり。

摩箇儒鶏麼虚曾。不纏来者也。万葉巻三に尚不如家利。巻四に夢尓不見来とあると同じ語にて不纏ずとは不知とも云也。辭羅儒等茂伊波梅。不知等毛将言也。枕をかはしたる事あらばこそしらずともいはめ。共寝したる事もあれば今更かくまでやはと也。不知と云ふ事を俗云よく聞入ずといふ意なり。

不知といふ意なるべしと契沖いへり。

時皇后令奏言陸下納八田皇女為妃。其不欲副皇女而為后。遂不奉見云云。

四十年春三月。納鵃鳥皇女欲為妃。以隼別皇子為媒時。隼別皇子密親娶而久之不復命。於是天皇不知有夫而親臨鵃鳥皇女之殿時。皇女織縑女人等歌之曰。古事記には女鳥王と有て皇女と書かず。その御歌も上に載せて記せり。

○古事記云。於是女鳥王坐機而織服。尓天皇歌曰。賣杼理能和賀意冨岐美能淤呂湏波多。他賀多泥呂迦母。女鳥王答歌曰。多迦由久夜波夜夫佐和氣能美淤湏比賀泥。

比佐箇多能。日剌方之也。はめよかゝれる発語頭。万葉巻三の説よあし。阿梅箇儺麽

多。天綺之機也。里を省き、之を無。二紀よ綺戸邊とあるを古事記よてハ羽田刀辨とあるハ、加利波多ハ加登里機也。万葉巻十四よ筑紫なるにほふ児よ對

些つよ見れ乃久能加刀利乎登賣の由比思比も等くとあるまに、綺を織る女を綺少女といへるにて、女巧をもいへり。即女鳥はむるゝとせしとも云也。比

せハこゝも綺を女王よ比し。その綺を織速 謎迺利餓。鵙鳥之也。女王の名。於

總別の由をこふるをのせしげへるも、須か判。

瑠箇儺麽多。織綺機也。如上註。波椰歩佐和氣能。速總別之也。皇子の名。

洟。 瀰於須臂鵝泥。御襲我称也。その衣をおほひそ。女のかゝる押日

云ふ。云のとしるて、その衣や、もいうへの着き

ぬ衣数をもうす。古事記八千矛神の御歌よ、奴那登理遠母伊麻陀登加泥婆。云云。万葉巻十四よ古呂賀伎能布遠可受都由気比

遠母伊麻陀登加泥波。云云。万葉巻十四よ古呂賀布須比

おもき八雲の服そし。こゝとめしげてりやとの、こふこ左がの舞のなど

いふの御そうゝ。兼て御そひ数ちそといひて、万葉よ巣伴よ我称よ我爾とも有り。

○古事記曰、故天皇知其情還入於宮。此時其夫速總別王到來之時、其妻女鳥王歌曰、比婆理波阿米迩迦氣流多迦由玖夜波夜夫佐和氣佐邪岐登良佐泥とあるも。

ていとおほうちと、皆某そそほんと

いふさうそ。九をも恨へてし。

俄而隼別皇子。枕皇女之膝以臥。乃語之曰。孰捷鷦鷯與隼焉。曰隼捷也。乃皇子曰。是我所先也。天皇聞是言更亦起

恨。時隼別皇子之舍人等歌曰。古事記ハ此ゐのうてゝ、是やはやふさ

破夜歩佐波。隼者也。皇子ふくハし。阿米珥能朋利。昇於天也。釈紀云。可

昇天位也。等弭箇慨梨。飛翔也。伊箇岐餓宇倍能。五十槻之

上之也。万葉巻十三よ百不足五十槻枝丹水枝指秋赤葉とよみ、機ハいと

けやきといふのやうなりかくいへるて、大鷦鷯尊の、高く大御位よ大まし

すゝむを。娑弉岐等羅佐泥。鷦鷯令捕也か、しかしも大鷦鷯を令殺まりと、大雀信もと奪すへ
望言なる。
とらふるをとするを、らしの、ハるゝ、せとしを延るる古言や。
万葉ふよ行さの、介さの、なきしゆすると有。令行令介の延言なると、

天皇聞是歌而勃然大怒之曰、朕以私
恨不欲失親忍之也、何豐矣私事將及
于社稷則欲殺隼別皇子時皇子率鴨
鳥皇女欲納伊勢神宮而馳。於是天皇
聞隼別皇子逃走即遣吉備品遲部雄
鯽播磨佐伯直阿俄能胡曰、追之所逮

即殺云云。雄鯽等追之至菟田迫素珥
山時隱草中僅得免急走而越山於是
皇子歌曰、

○古事記云、波斯多弖能久良波斯夜麻袁佐賀志美登伊波迦伎加泥弖和賀弖登良須母。又歌曰、波斯多弖能久良波斯夜麻波佐賀斯祁杼伊毛登能煩礼波佐賀斯玖母阿良受。

破始多弖能　梯立之也。梯を立たる如き、山の嶮しきといふ也。古事記ハ、久良波斯夜麻波と、つゞけたり。万葉ふ巻七ある。
橋立倉橋山。又橋立倉椅川ともよみてあり。梯ハ和名抄ニ郭知云梯。音低。和名加介波之。木階所以登高也とあり。
佐餓始枳椰摩
茂。嶮山。
毛也。
和藝毛古等　與吾妹子也。わがいもこを、賀伊の約藝なれ。我家を和藝へといへると同
赴駄利古喩例麼　二人越有者也。
椰須武志呂箇茂
茂。安席哉也。安ら不ハ祝詞ニ安気平気と展ふ。安きハ郎平らの形る意なるを。席ハ身代まて、宮もいろう人ハみしろと云。頭宗紀歌ニ伊儺武斯盧呼簸比

野儺擬よ作て。師の冠辞考よ寐席草とかへるハ云ぞよからぬし。古事記須勢理毘賣命の御歌よ牟斯夫須麻といへるも席衾よて寝所よ引敷衾なるべし。万葉四巻の御紀よ訓しも是なる云をて按るよ安席ハ寝所の席也安くねらるゝなるといふ。妹とれ寝嶮しき山路も多此とおろかなくやまとしらんおもはしめすといふ事継ぎとしえるなし。

爰雄鯽等知兎以急追及于伊勢蔣代野而殺之。

五十年春三月壬辰朔丙申。河内人奏言。於茨田堤鴈産之。即日遣使令視曰。既實也。天皇於是歌以問武内宿禰曰。

○右の紀ハ此句、余能那賀乃比登よあり。次の二句なし。

○古事記ハ阿岐豆辞莽の句を。蕪良美都とせり。倭の枕詞。万葉考よ委し。

古事記云。一時天皇為将豊楽而行幸日女嶋（摂津国也）之時。於其嶋雁生卵。尓召武内宿祢命。以歌問雁生卵之状。其歌曰云々。河内と摂津とその地の傳異あり。

多莽耆破屢（註如上） 宇知能阿曾（註如上） 儺虚曾破

汝こそ者也。こそハ助辞也。汝ハ親しみ呼ふ称なり。

豫能等保臂等

世之遠人也。遠とハ久しく老たる人をいふ。遠きとしふるゝ万葉巻九よ遠妻四高尓有世婆といへるも遠き妻といへる事也。巻十一よ高々二吾待君といへるも。巻四。巻十二。巻十三。巻十八巻十七。等よもみえたり。とほくよ吾待といふ也。

儺虚曾波（註如上） 區珥能那餓臂等

國之長人也。吾國第一の長命の人と訴ふるなし。

阿耆豆辭莽

秋津嶋也。神武天皇紀よ大倭云よて発れる号なり。紀よ見えたり。倭國を讃へりし云なるを。後に畿内よ亘し。ても云ふれど。次の句ハ耶麻登の国号なるべし。

椰莽等能區珥々

於倭國也。倭とハ上つもいふめり。たゞ此一国の号ならず武内をうけていふ云と
なるも後ハ惣て大八洲国のみなる称となれバ宣長が国号考に詳
なれバ今ハ省くなり。倭の号の説也。箇利古武等。鴈卵産登也。うむの
が考にて万葉の巻三の歌によくあへり。宇を省くハ古言や。
古事記にて加理古牟登岐。儺波企箇輸椰。汝者聞鴈哉也。加須を約
久夜とあり。次の句あり。まバ久とかよはしおもむ記
に岐久夜とあるは同じ。きこゆやきかせるや なそ。
聞かせのやうそ聞かしるやうそすゝるるも同じ同せのことし。

武内宿禰答歌曰。

夜輸滅始之。安見為之也。下於之ハ助辞。万葉に考によまし。和我於朋枳滅

波。我大王者也。この二句万葉にいとあやくて次の句を高照日皇子と続て
あるを、この言にして万葉巻三の歌にあしくいへるをもあり。記ハこの句
なくて多迦比迦流比能美古おりの辞なりと高く天に照すの意を
万葉に見えしく此紀に云ふ一句を脱せるにやあらむ。于倍儺于

倍儺。諾也諾也。うべなハ承諾の意也。万葉にもあまた詞也。後世ハむべと云也。和例烏斗波輸儺。
我乎問為也也。下於ハ也といふ意。後ならバ和例迩とはうべきを烏といへる
る八古云也。烏と彼とをいふ云ふ。迩ハ我をいふ云ふ。彼我の差別あり。次の
句に阿布夜烏等謎烏とある烏もとをあれあることを吾にあらぬ也。よく考て心
得おくべき也。古事記にハこの二句を宇倍志許曽斗比多麻閇として次に麻
許曽迩斗比多麻閇阿禮許曽波余阿企豆辭摩。如上註。古事記ハ古
能那賀乃比登といふ四句あり。蕪良美都と
市やうしの絃万。耶賦等能倶瑁々。如上註。箇利古武
よく考よあし。
等。上に註す。おとし。和例破枳箇儒。我者未聞也。古事記にて伊麻陀岐
加受とあり。古事記云。如此白而被
給御琴歌曰。那賀美古夜都毘迩斯良牟登加理波古牟良斯此者本岐歌之片歌
也と云云。初句ハ汝之御子哉也。二句ハ遂尓将知登也。その意ハまつ長く世を
知しめさむかくるもあらし此さまうるも後終まで知る
さんとこうし雁が卵を産らしといふ意をけむ。

第十二卷。去來穗別天皇。一首。
履中天皇。
八十七年春正月。大鷦鷯天皇崩。皇太
子自諒闇出之。未即尊位之間。以羽田
矢代宿禰之女黒媛欲為妃。納采既訖。
云云。爰仲皇子。畏有事。將殺太子。密興
兵圍太子宮。時平群木菟宿禰。物部大
前宿禰。漢直祖阿知使主。三人啓於太
子。太子不信。一云。太子醉以不起。故三人扶太子。

令乘馬而逃之。仲皇子不知太子不在。
而焚太子宮。通夜火不滅。太子到河内
國埴生坂而醒之。顧望難波。見火光而
大驚。則急馳之。自大坂向倭。至于飛鳥
山。遇少女於山口。問之曰。此山有人乎。
對曰。執兵者。多滿山中。宜廻自當摩徑
踰之。太子於是以為。聆少女言而得免
難。則歌之曰。

於朋佐箇珥。於大坂也。古の大坂ハ。大和の葛下郡にて。今の竹内越と國府越との間に。一道ありしを。そのみちに大坂村有て。大坂山口神社もありしとぞ。それハこの山なり。されバ越に河内の丹比郡飛鳥村にありし。大和國人のいへるよし。書紀に所謂近飛鳥也。されバその里に飛鳥山といへる。即是飛鳥已にまうづる軌行の道を越てしいへるなり。よりてよく考べきなり。阿布夜烏等

謎烏

遇哉少女鳥也。今これ云にもとあるはハの中といふなり。をとめをとゆ只。古言あるはし上にいへる如く或きの助辞中むへしのものもえええるを。

瀰知度沛麼。路問者也。哆駄珥破能邏孺。直尓者不告也。直とハ直径にて。大坂より直径と石上れ神宮に行幸ハ近きみちなれバ。ハ中されてとりに書也。告ハのとを。万葉集中にも能留と訓るを都遇の古言。

哆摩嵜摩。

知手能流。當摩路乎告也。是ハ今の竹内越なるをあれて。おしやる一ことあるを當麻へ至る当麻越といふにや。といふにや。さきを遂て名上にいへり。手にまつしハ近きをのあるなるみちかくをとらへ告しる遂て。路を免あへる也。歌意ハ此意ならしかへすへ清くかぞ。

第十三巻 雄朝津間稚子宿禰天皇。

九首。

允恭天皇。

八年春二月。幸于藤原密察衣通郎姫之消息。是夕衣通郎姫戀天皇而獨居。其不知天皇之臨而歌曰。

和餓勢故餓。吾兄子之也。仁賢紀云。古者不言兄弟長幼女以男稱兄男以女稱妹とあれど。万葉集等を考るに男どち互に勢といひ。女どち互に妹といへり。ここを勢ハ男の称。妹ハ女の称と心得べし。よ我子ハ阿兄子も阿妹子も云ありて睦しむ云ものし。ハ既に上にいへり。ハこの兄子ハ我が夫をさしていふ称し。

句倍枳豫臂奈利。可來夜也也。こひよる夜。いかなるとよめるハ雅也。

○古今集にさゝらハと。さゝらしそのさゝ。かつ以ひゆるさゝかつらも。されたるさゝ也とも云。さゝ竹らの也。さゝがにハいふ。ささらのほそき糸をいふなり。さゝがにとハ蜘の名也。さゝらのひ也。文下に蛛といふ也。べきにやあらん。笑ひ。くもぞかゝる事なり。すともあらめ。○此條ハ。諸の説ハあるの説。よりも通用せり。よむいへども。又外の説あり。

経をいふ云なり。取り郁とおもし。

佐瑳餓泥能。小竹之根之也。細といふ云なり。二ハ。小竹の名。万葉巻二に。小竹之葉者三山毛清亦乱友とあり。○集中。假字に。佐々と。佐々賀波。泥ハ。松が孫の根ヶ同じく。本をいふ。細く。かゝる師の歌。君の解にいはれし如く。組して隠る。蟹の二をとりてなるといふ云也。今久度笹といふ名のあるを。即隠て小竹なるを係揚べし。蜘の毛と久年とハ同あらねハ上八重の同の所なり。ならくも。

邑茂能於虚奈比。蜘蛛之挙動也。くもといふ名も。その細といふよりおこりて。その細といふ名の心を。鋼より名づけ。わかつらしき男女のおもひもなく。古事記の歌に。伊久美陀氣。伊久美波泥受といへる。男女の隠て寝る事を云也。この云をそ。この発。しく挙動を云。即よく。蛛のふるまひを見。今夜験毛也。君来ませ。吉祥のきざし。といふなり。

虚豫比辭流辭毛。

天皇聽是歌則有感情而歌之曰。

○さゝらのえハ。万葉四巻。古説よりいふをえべし。

佐瑳羅餓多。細紋形也。ちゝの巻に小さき紋といふ云なり。万葉巻十四に。細紋と佐々良手擬。和名抄に。細石。和名佐々禮伊之。万葉十三巻に。さゝら多ならぬも也。小浪をさゝら波と云も同じ。形をいふ。紋といふはなるもあり。延喜神名帳に。伊勢國多気郡服部圓方神社とあるも。圓紋を云なるべくおぼゆ也。同大神宮式御装束条に。小紋紫被。小紋紫衣などえる小紋をお取ては。さゝらがたとなるべし。月の名を佐々良壮士といふ。頂紋の錦などといふ類をも。みな考べからず。

邇之枳能臂毛弘。錦之紐乎也。古もく上紐下紐いまの紐なと。差はあれども。いはゆる紐を左右に縫著て引結ぶものと見えて。万葉巻十二に。狛錦紐乃片方ぞ床に落にけるとあり。又巻十六に。水縹絹帯尾引帯成韓帯尓取為とある。帯の紐ともいふ。紀中。衣帯の二字を紐とも訓して。紐を帯とするを知べし。さて紐を結ぶは。誰よりもしき縁として。男女のよしみありさま也。

等枳舎氣帝。解開而也。万葉巻十一に。狛錦紐解開。巻四に。紐解放而。とあるをもちて知べし。巻十九に。紐解不離。とも見えたり。上應神紀の豊祝の下はさとき。の解はいへるをもみるべし。

阿麻多烏泥受邇。數多者不寢尓也。今本。泥受受邇とあれど。

迹ハ訓なれバいかなるやあらへるに。紀中の歌に訓と用ひし仮字なし。釈紀ハ迹 多儴比
に作れり。字畫の似たれバ今本ハ誤れるを知るべし。

等用能未。唯一夜耳也。何すれぞ歌ハ唐うたらひあるべし。一歌ばかりハせめて打解て語りまじへ。大御心に甚しき意也。
さる太皇后の御嫉妬をおそれさせ給ふ。耳といふ言は漢籍に何而已とて
ぢかむるのみなり。その意是也。あるが中に此の川を見つつ。意の字を知るべきこと
や。古哥をよみ比
て知るべし。

明旦。天皇見井傍櫻華而歌之曰。

波那具波辭。花細也。くはしき称美の詞なるよし。上既に辞る。万葉巻三の歌説。名細の條に論あげることも。今ここに櫻ハ花
のうちにもことにかいうまいなれバ花
細桜といふが本のまゝせしなり。
を含めて。御歌し。此の能を手に御辞に弘しくかる
つまぜずらしきなり。此の言は旬を偏へ。後の旬へつゞける
佐區羅能梅涅。櫻之賞也。桜のめでくだる
と訓ふる意。能ハ如くの意

許等梅涅麼。

如是賞者也。此の許等といふ言は。今の世の言葉におと云ふやうだ。時々ぞやくあらじ。櫻花
のうき色さく。にぎはしくもあるに。よの言を彼集の諸説に
しば説あれど。いづれもあるまじきも。おもしろく覚ゆハ如是なりといふ言に
て。今の言にこの桜をみるならバ。よのことをはずらふ
言の同じ。万葉巻七に。殊放者奥ゆさけるなし。湊自邊著時に可放鬼香。巻十三。琴
酒者國丹放骨別避者宅仁離南乾坤之神志恨之草枕此羈之氣介妻應離哉
とあれば。殊も琴も別も段字なりて。如是放んと云くなしてるよるを。
おもひ出るむべしはなしの賞めるといへるなり。

波椰區波梅涅孺。早者不賞也。花もそしも愛でありといふのをといふ言也。
此の枝梅をも上にある。痛不貢者。万葉にも云ふなるは。痛くも乞ふてあるより。長歌をよりて
着長歌せしより。痛不貢んより。さすれば。
とりふる言と上を結びて。桜も痛不貢あるを。その痛
ふ貢んよりふると。言うのきて。さくなる。かくて皇后の御
如にあるべく。おもひしはれるより。かくれ賞めるハ
ハ賞るにあるをんとて。
の語と訓ふなり。

和餓梅豆留古羅。吾賞子等也。子等るハ
衣通姫をさしてへ

あさるハ定あし。万葉集巻七ニ。吾を吾背子とおもへる以
知るべし。上の櫻の花をも同じ心にみるべし。

十一年春三月癸卯朔丙午。幸於茅渟宮。

衣通郎姫歌之曰。

等虚辞陪迩。常経尓也。陪ハ上陸建命の歌のうちにもあり。万葉集にも常之倍尓。

枳弥母阿閉椰毛。君毛遇武毛也。椰ハ與の意にて疑の辞。下にも毛を助辞なり。

異舎儺等利。不知魚取也。海にかゝる枕詞。四瓶勇魚取ともいへり。万葉にも勇魚鯨魚と書。壹岐風土記にも鯨魚為伊佐とあれども。四瓶よりおもふに似たれど。万葉巻二にも鯨魚取淡海の海とありて。湖なるも鯨取といへり。又巻六にも鯨魚取浜べをきよみとあれば。海の助辞。伊佐利と。近江の射をいふ人あれども。伊佐利は須奈杼利

八同語にて。須奈杼利と伊佐杼利と通へり。同じといふ説ハ的説といふべし。此ぞ伊佐奈取也。漁の本語にて。万葉集に鯨魚勇魚と書しも借字とすべし。さてそのいさなとりを省きつゞめて。伊佐利とも本語をとりの略なりとぞ。伊佐利と又佐利を省きていふやといひて。かくて伊佐里ハ阿佐理と反對ありて。伊佐にて万葉集巻四に不知也川などもいへり。集中伊佐ハ不知の不知と云直言也。阿佐ハ浅どいふの不知の意なり。沖に入れる魚の不可知を。網して取る事ありて。伊と省きて佐とあへの略なれば同じ意と云なり。伊佐奈取を取りて。その反對求なる辞にあれど見なしていへる意也。捕ることを不知魚取と云。阿佐利にて地上にあるを取るを阿佐利といへば。いさなとりを。略の中にも浜辺の辞とも漁。守りて海にかゝる枕詞とすべし。猶万葉四巻を見よ。

宇瀰能波摩毛能。海之濱藻之也。左の額の表にあれば。浜藻ハ名を辞にあるなれ。神馬藻也と云。和名抄に云。漢語抄に云。神馬藻三字云奈乃里曽。但神馬莫騎之義也。とよみ。今はなのりそといふ事也。

余留等枳等枳弘。依時々乎也。濱藻の寄る時々をいふ也。海の浜辺に寄るがあとの。はるかに見るを。逢ひ見ることのなきを。浜の藻の寄る時々を待つにたとへて。弘ハ助辞なり。神代紀の八尋の八十垣乎と同じ事なりとすべし。

○このはなの歌。万葉三巻の解にいへり。
しきことはその巻を見よ。故四巻の説を見るべし。

時天皇謂衣通郎姫曰。是歌不可聆他人。皇后聞必大恨。故時人號濱藻謂奈能利曾毛也。莫告藻也。告とハ上ニ云如く。つぐといふをのりといふ也。

二十三年春三月甲午朔庚子。立木梨輕皇子為太子。容姿佳麗。見者自感。同母妹輕大娘皇女亦艶妙也。太子恒念合大娘皇女。畏有罪而默之。然感情既盛。殆將至死。爰以為徒非死者。雖有罪。何得忍乎。遂竊通。乃悒懷少息。因以歌之曰。

○古事記にハ此下に斯多杼比爾和賀登布伊毛袁の二句あり。

阿資臂紀能。足引之也。山ハ山の稱をいひ引くハ引事をいふ也。万葉集の歌にもあしひきの山とつゞけたり。

椰摩娜烏莵絢利。作山田也。椰摩娜箇弥。山高之也。高ハ峯長きをいふ也。

斯哆媚烏和之勢。下樋走也。下樋ハ地中ニ埋る樋をいふ事。万葉集巻十一下樋山下逝水之上不出と。あるもおなじ。和之勢ハ走らしめ也。水をつたへて流しさるハみそうにあるひめをしたひわかれにいひかけて。下樋の中ゆくがごとしといへり。雄略紀の御製ニ和斯里底能盧斯企椰摩。万葉巻十三ニ走出とあるも。この例にて。走ハ度と読る也。万葉巻二ニ波之里とある。雄略紀の大みあそびにつゞけたる趣をも見るべし。

多那企貳。下泣尓也。さゝと哀をいふに云なるべし。和餓儺句
のどかなるにしのびに泣をいふなり。
莵摩。吾泣妻也。泣といふ意、泣也。箇哆儺企貳。獨泣尓也。かさハ乍
ちかつ紀にハ。下なるつまの字有。思のうへそ獨の意。
和餓儺句莵摩。如上軽太子紀に在。去鐏去曽。昨夜也。
ちかつ紀に二句なし。欽紀に云。
去鐏如謂與信といへる。万葉集巻二に、君當伎賊乃夜夢尓所見鶴。巻十四に伎曽と許呂と
母許呂比毛と。伎曽と去曽と、通音なれバ、欽紀の説によるべし。
いへり。同意の云ともなし。下の蓄ハ。
助辞也。古事記ハ下に字の字あり。椰主區波娜布例。易膚觸也。膚ふれし。
易くふれ逢まゝといふ意。万葉集巻十四に、宇倍かのもむかひの、くるのしむるのうらし
に尓比波太布例思にちかしもなし。今本に津娜布例てありて、下樋の説。
流あるやうに如く、下に通しけるを、部にきとやすれど、紀伊に記の
と見ゆる假字なれバ、津の字てなんやうなれ。ちかつ紀にて、波陀布例とあれバ決
て居なかり、ゆゑしむるとひて、
れまかしつるし記しつるそ。

二十四年夏六月。御膳羹汁凝以作氷。
天皇異之卜其所由。卜者曰。有内亂。蓋
親々相姧乎。時有人曰。木梨軽太子。姧
同母妹軽大娘皇女。因以推問焉。辭既
實也。太子是為儲君。不得罪。則流軽大
娘皇女於伊豫。是時太子歌之曰。ちかつ大子是為儲
君不得罪。と云といへるハ、作れる紀の文飾なるべし。ちかつ紀の篠りまかなるそれ
ふるのまをし来るに、大にかたる。伊豫に配し。実女ハ伊豫の國にて、しかれるをる
へりておかるをやそうの紀に、ちかつ紀の
ふまに伝るかなるべし。

〇古事記ハ波夫良波とあり。

於褒企弥鳥。大君乎也。大君ハ天皇皇子諸王すべての称也。女王をも申せる例あり。万葉集にみえたり。巻三の紀にあしくいへり。志摩珥波夫利。嶋尓放也。島とハ伊豫國をさせる。此紀の趣なり。波夫利ハはふらし捨ることを云。神代紀上。次生蛭児云々。故載之天磐櫲樟船而順風放棄云々。この故事の二字はぶらしきと訓べき也。崇神紀上尓斬波布理其軍士故号其地謂波布理曾能。万葉巻二ニ玉藻息津藻朝羽振風社依米夕羽振波社来縁。古事記ニ葉ハ捨つるをいふも。ちらしはふらしと云ことを訓み合せり。そのこゝろをかくし。葬送とばかりいふなり。やゝまされるりゃ書紀の歌を捨てる物なれバおなじこゝろなり。布儺阿摩利。船餘也。今も船人の云よ。船の出るにのこれるもの。その船の餘りし。や近く残る船の餘りと云也。異餓弊利去年鋤。伊飯將求曾也。其餘りのはしや船の餘りと云也。わが身の残りしをかへりてよそに捨てんといふなり。和餓嗚嗚弥由梅。我畳勤也。万葉巻十五ニ到壹岐嶋雪連宅満遇鬼病死去之時作歌ニ伊敝妣等能伊波比麻多祢可多大未可毛安夜麻知之家牟云々。同巻十九ニ梳

毛見自呂夜保乎毛波可自久佐麻久良多婢由久伎美乎伊波布等毛比豆と紀ぞ。式ある例を合せて考るに。いづれ人の後ニ畳ねあやまりて衣の所にかきし八ぐら旅人の獨ゆくを。故に夢をいはふとて屋内をきよめ洗ふとて謹みてあやまちなきやうにとて。さればこゝろもあまりあやまらぬ。はしゐみ〳〵。守女の今年くはらず手をさしと。斯るや和餓もこの新しきものをかへぞ。ちとそ。助辞。

唹多弥等異絆梅。疊登將云也。去等烏許曾。辭乎也。和餓菟摩烏。由梅。我妻乎勤也。手ハ與の通ふ手也。古事記ニ。いそのめ。実ハ吾妻よ。努力あやまちなく。今年くはらず立て。その残を捨てとも詞ならし。古事記仁德の御製ニ許登許曾婆須宜波良登伊波米阿多良須賀志賣とも紀にはよみ合べし。

又歌曰。

阿摩儾霧天飛也。登ぶと云。多牟とハ同鞁ニ通ふ也。万葉巻三ニ紀。玉梓の使ハ云々とハ続きて鳥をたとへとも云ぞ。

鳴すかしき歌の意は。万葉集巻二。巻十一。巻十五。などに見えたる歌と同じ。箇留

様なれど。軽の社の…おなじ。まよひて…軽の郷にも見えし。

惋等賣。軽嬢子也。或は説に加流。異哆儺介麼。痛泣者也。今いふとなりといふ。

乃遠登賣と称す。

臂等資利奴陪瀰。人知りぬべしといふ。泣ば甚しく泣

ば人知りぬべしといふなり。知りぬべく

人可知也。或記にも。

瀰と志しせしも。

幡舎能夜摩能。羽狭之山之也。契沖云高市郡にある山の名なるべし。履中紀

に鳥往来羽田之汝妹者羽狭丹葬

立往とある羽狭の山と云へり。今考ふるに。

波刀能。鳩之也。鳩の如くにといふ意。資哆

儺企迩奈句。裏泣に泣也。声を忍びて泣く。既に上にも見えたり。裏は万葉集巻三

に裏泣。五百重之下に。とある。五百重の裏といふ。

來てよ。裏紐。泣裏無者。なども見ゆるはみな忍びて泣くのこころなり。巻一に奴

要子鳥卜歎居者。とあるもおなじく。奴要鳥も喉声にして裏泣ともに泣ともに

いひ。ひくくして泣くのこころなり。

忍びてなく様なり。泣のなくなり。

穴穗天皇。二首。安康天皇。

是時太子行暴虐淫于婦女。國人謗之。群臣不從。悉隷穴穗皇子。爰太子欲襲穴穗皇子而密設兵。穴穗皇子復興兵將戰。故穴穗括箭。輕括箭。始起于此時也。時太子知群臣不從百姓乖違。乃出之匿物部大前宿禰之家。穴穗皇子聞則圍之。大前宿禰出門而迎之。穴穗皇

子歌之曰。古事記に。こゝの二首。允恭の條にあり。云。於是穴穂御子。興軍圍大前小前宿祢之家。爾到其門時。零大氷雨。
故歌曰。云々。
於朋摩弊。大前。烏摩弊輸區巫餓。小前宿祢之也。旧事紀に。物部大前宿祢。氷連等祖。小前宿祢。田部連等祖。並参入宿祢之子也。とあれど。二人の名とするは。また古事記よりいへるにて。全く一人の名也。姓氏録に。氷宿祢。氷連。石上朝臣同祖。饒速日命十世孫。伊己灯之宿祢之後也。とあれど。旧事紀の参入宿祢の子といへることも。いとうたがはし。此紀の意にては。大前宿祢とのみありて。小前といふことも。なければ。かならず一人の名とぞおぼゆれ。大も小も。此紀の意にていふ。褒言なれば。大前とも小前ともいふべし。言をかへて。小前といふにやあらん。
詞那杜加礙。垣之門陰也。この歌の第二句を省きて。万葉巻四に。金門爾之人乃來立者。又金門爾念有之。皆假字也。巻十四。児呂我可奈門欲。又可奈刀田とも。見えて。後の加杼田といふも。古の加奈門田乃黒記也。万葉巻四の解に許也。

○古事記には。夜末年とあるは。蓋末八米の誤なり。
○弁玉八。万葉集巻三に出。その考へ。前にあり。

訶區多智豫羅泥。如是立寄祢也。吾立ての垣門の陰に立寄るべし。大前宿祢の吾家に来らせ給へといふ也。祢は冀の詞。古事記にも。余利許泥とあり。
阿米多知夜梅牟。雨将立止也。古事記に。零大氷雨とあれば。雨の降ることを。しるしにいふなり。この垣門陰に立寄るべし。雨を止しもてめぐ。宿祢のうれしきに。世にいふ。雨やどりせよ。といふ也と。契沖は信れり。
大前宿祢。答歌之曰。
瀰椰比等能。宮人之也。阿由臂能古輸孺。脚帯之小鈴也。下紐の鈴也。皇極紀に。阿用比拖豆矩利とあり。万葉巻七。巻十一。巻十七などに出。大臣出立於庭索脚帯とあり。手玉手鈴など。あしに着けて。脚帯にも鈴をつけて飾れるなるべし。按るに。上古は。かゝる事も。ありけるなるべし。
於智珥岐等。落爾伎登也。宮人の宿祢が家に落つるとも。せまりて。ゆるやかに伎登といふも。助辞也。
瀰椰比等々

豫年。宮人動也。是は穴穂皇子軽皇子を攻給ふとて宿祢が垣門に詣ましゝをいふ佐杜弭等茂由

梅。里人毛努力也。里人もの下に等余年といふ三言を、今の本に加へたる誤なるべし。この三言は上に讓りて省きたる也。總て里人は宮人に對てあるの直人といふ宮人も直人もよまれたるにゆゑに分数讀にもとよみて議るもとよみておかれたなり。

乃啓皇子曰。願勿害太子。臣將議。由是太子。自死于大前宿禰之家。一云。流伊豫國。

第十四巻。大泊瀬幼武天皇。九首。雄畧天皇。

是日大舍人。驟言於天皇曰。穴穂天皇。為眉輪王見殺。天皇大驚。即猜兄等。被甲帶刀。率兵。自將。逼問八釣白彥皇子。皇子見其欲害。嘿坐不語。天皇乃拔刀而斬。更逼問坂合黑彥皇子。皇子亦知將害。嘿坐不語。天皇忿怒彌盛。乃復幷為欲殺眉輪王。案劾所由。眉輪王曰。臣元不求天位。唯報父仇而已。坂合黑彥皇子。深恐所疑。竊語眉輪王。遂共得間

而出。逃入圓大臣宅。天皇使使乞之。大臣以使報曰。蓋聞人臣有事。逃入王室。未見君王隱匿臣舍。方今坂合黒彦皇子。與眉輪王。深恃臣心。來臣之舍。誰忍送歟。由是天皇復益興兵。圍大臣宅。大臣出立於庭。索脚帶。時大臣妻。持來脚帶。愴矣傷懷而歌曰。

飫瀰能古簸 臣之子者也。圓大臣をさしていふ。臣とは朝廷に仕奉る宮人をいふ称。既に仁徳紀の哥に説たり。子はあそこ

まで(に)呼称なり。よしも上にいふ。

多倍能婆伽摩鳥。 帛之袴乎也。多倍は布帛の通称。袴は男の衣服なり。

那々陛鳴施。 七重着也。鳴施は賣須と同じ。著ることをいふ。

儞播尒陁々始帝。 庭尒立而也。

阿遥比那陁須暮。 脚帶之徒結毛也。

大臣裝束已畢。進軍門跪拜曰。臣雖被

○万葉巻十二。里近家哉應居此吾目乃人目乎爲乍戀繁口。今本に元の字を之への二字とす。誤也。そを解。

戮莫敢聽命古人有云匹夫之志難可奪方屬乎臣伏願大王奉獻臣女韓媛與葛城宅七區請以贖罪天皇不許縱火燔宅於是大臣與黒彦皇子眉輪王倶被燔死

四年秋八月辛卯朔戊申行幸吉野宮庚戌幸于河上小野命虞人駈獸欲躬射而待虻疾飛來噆天皇臂於是蜻蛉忽然飛來齧虻將去天皇嘉厥有心詔群臣曰為朕讃蜻蛉歌賦之群臣莫能敢賦者天皇乃口號曰

野磨等能 倭之也古事記ハ美延斯怒能と有。延と与しおなしく真吉野之。 鳴武羅能陁該儞 小村之嶽尓也。今の吉野にて小村といふ里ありて其山を小村が嶽といふと其所の人いへり。此の新宮ハ大瀧のあたりなるべし。蜻蛉ハ今あきつといふ。かのあきつのやよりつたへたるか。記ハ袁牟漏賀多気尓とある。こそおなしきを、いひつたへ侍り。 之々符須登 獣臥登也。之々ハ猪鹿の通称 枸例柯擧能居登 誰欲此言之。古事記ハ礼曾をかて、このみを の四言ハ 飫裒摩陛你摩嗚須 大前尓奏也大ハ称也。天皇御自らく詠つる事皇紀の古例し。

○万葉集巻六に。奥津伊久利二鰒珠左盤尓潜出とよめるハ。御貝をいふ也。彼巻の解に委しくせり。

ゑかしこいふなるし。万葉集巻六に。神武天皇の。天皇朕宇豆能御手以。とよみたる
なりけり。おもひ合すべし。一本。以飫裒摩陛你磨鳴須。易飫裒枳泝你麻鳴須。大王我
癸也。おほきみを。當代天皇を称なるよし。万葉集巻三の記に。飫裒枳泝數。大王者也。天皇の御自称也。是も万葉集巻三に記し
賊據鳴枳舸斯題。其所牢所闻而也。今ぞかしといふこと。古語に
ろくとハ傳り。万葉集巻一に。曾許之恰之。巻二
に其故に。なども有て。柂磨々枳能。玉纏之也。何となく記。玉もてかざれ
事にいふ多かり。ろハ。古ハ物をく。いとくしての玉を
貝なるべく。おもふすゞあれど。後の阿娯羅你陁々伺。立胡床也。和名抄云。風俗通云。
螺鈿の類を。玉纏といふ云々にや。霊帝好胡服。京皆作胡床。此間名阿久良。
とぞ。安良の類をいふなるべし。あぐらハ足案也。一本。以陁々伺易伊麻伺坐也。
施都魔枳能。倭文纏之也。志づハ。上古よりはやりのすじ。
とせちたる事に。大王乃御帯乃倭文織又
帯をさして。貴人の帯にも。玉をもて飾り。倭文もて
纏らるゝぞ。めでたき限なれ。かく解つらねあはれなりけりぞ。
阿娯羅爾

陁々伺。如上註。古事記にハ。上六句ハかくて。夜須美斯志和賀意富岐美能。と云ふ二句あり。斯々魔都
登。實待。登ハ登也。倭我伊麻西磨。朕坐者也。佐謂麻都登。小猪待登也。佐ハ俗
の陳云。小牡鹿。倭我陁々西磨。朕立為者也。古事記にハ倭我伊麻西
の儀りあれど。磨より下ハ。たる三句なくして。阿具
良尓伊麻志斯漏多閉能。蘇弖岐蘇那布。の三句あり。陁俱符羅尓
胡床に坐白妙之袖着備也をかくて不足なりと云言也。
手腓尓也。和名抄云。腓。腓腸、詞云。腓音肥。訓古無良。見周易。脚腓也。とあり。今ハたゞ腓とのみ
古事記にハ。多古牟良。腓ハ肉むら聚まる所なれば。肉群の意なる
べし。肉と胡とのみ。瘡肉とも胡久美とも。阿万之ろともいふ。和名抄にいへるハ。餘肉
組の意とする四めてし肉と神といふて。いかなるにかや。いまだおもふ所あれ
阿武柯枳都枳都。蚋掻着都也。和名抄云。説文云。蚊嚙人飛虫也。とありて
同字亦作虻。和名阿夫。
きとるを。掻むを掻撓なども。掻るて。係云。能きハ。刃着る也。
ありし記にハ。下を神手の如し。都ハ助辞なるし。
曾能阿武

嗚其虻。婀枳豆波野倶譬。蜻蛉速食也。蜻蛉とはあきづといふ。和名
嗚手也。
抄ニ加介呂布の名のよしを挙て阿岐豆是ル名をあげたるはいかゞや。
べく蚊とのみ
餓哀枳彌你。波賦武志謀。昆虫毛也。大被の羽
よいふなり。
如上摩都羅符。仕奉也。まつらふは上景行紀
のみに見えたる摩幣菟香涕の解にいへる。前説しかるべし。
かくて是を誉めたまひしかば、はや此の蜻蛉を信じてまつるなり。
その名をあげたる故。
讎我柯陀播於柯武。汝之形者將置也。
その名をとりて仕奉の忠を致せり。
たとへば形見のごとし。又後へ至る迄。或ハ岩石或ハ宮居の
名を始め名代と定めのこし。倭ハ数虫とへども。其功ハ仕奉る忠誠を讃
めたまひて。蜻蛉の名を地に号て。後世
まで留置たまへるなり。阿岐豆斯麻野麻登也。秋津島倭也。秋津嶋
とは名を神武紀に。腋上嗛間丘に登まして。蜻蛉の臀呫のごとしとのたまひ
しより大和国の惣名となり秋津洲の号起りし。彼紀に見えたれど。こゝに云ふ八代

大和國をあきつしまといふ。蜻蛉のかく君の御為に仕へ奉る所由の
ありけるにや。されば其の阿岐豆斯麻といふも汝が形をのこしたまへるとしたまひしや
がて蜻蛉野と名付給ひし。説のごとく大倭を称へたまふべし。一本ニ以婆賦武志謀以下ヲ
昜阿矩能比等。如此爾。那你於婆武登。将ニ名ニ蕪羅游豆
婀岐豆斯摩登以簸。宝見野摩登能矩你。倭國
都也。
蜻蛉嶋とす。上よ
きるべきことをあげたるなり。古事記に此一本の如し。

因讃蜻蛉。名此地為蜻蛉野。

五年春二月。天皇狡獦于葛城山。靈鳥忽來。其大如雀。尾長曳地。而且鳴曰努力努力。俄而見逐嗔猪。從草中暴出逐人。獵徒緣樹大懼。天皇詔舍人曰猛獸

逢人則止。宜迎射而且刺。舍人性懦弱、縁樹失色。五情無主。嗔猪直來欲噬天皇。天皇用弓刺止、挙脚踏殺。於是田罷、欲斬舍人。舍人臨刑而作歌曰。古事記にハ又一時天皇云々。登坐榛上詠歌曰。ともあり。

野須瀰斯々。句。倭我飫裒枳瀰能。句。二句上に註がなし。

阿蘇磨斯志。所遊也。あそびたまふを、やはらかにいふ言とぞ也。古事記神代巻に、日八日夜八夜以遊とある、そのあそびの絶えたるにて、日八夜、啼哭悲歌とかゝれたる。遊ハ歌舞をかけたるすがたと知べし。又仲哀紀に、猶阿蘇婆勢其大御琴云々。今の言にもあそばすといふ言あり。万葉巻二に君跡時

時奉而遊賜比之とあるも皆同じ意にて、情を遣らんとていふ言にしあるべし。斯々能宇

柂枳。猪之吼也。宇柂枳ハ今の言にうなるといふなり。鳴ことをうなるといへるハ宇々鳴也。宇柂枳ハ宇を登鳴せるなり。其鳴声をいふ。万葉巻八に、宇柂枳ハ宇々の登鳴也ともあり。巻十四にも、うたきともいひて、甚猪の怒りて宇多岐といふ。古事記に、甚猪怒而宇多岐依來とあるも、猪の怒れる時の声なるべし。阿斯固瀰。懼也。かしこみハ、かしこまるといふに同じ。又ハかしこみと云べし。

倭我尼㝵能裒利志。昇也。我逃所阿理

鳴能宇倍能。在峯之上也。在ハありの、在根良、在嶺、とも云ふ。対馬乃渡とある同じ。存在の意也。尾ハ山の峯の事なり。をとよむべし、やゝみとよむべきかとも云ふ。

波利我曳陀。榛之枝也。榛ハ木の事にて、万葉巻三に云々。私記に云、所謂ハ所登之木、是波利乃木也。故に云ふといへり。古事記にハ、上に宇倍能の三言なく、波理能紀能延陀とありて、次に阿西鳴の三言もあり。

皇后聞悲興、感止之云々。

○蜂飄嗚野、轄嗚間に沈めり。○古事記ハ斯々能の下に、夜美斯志能の五言あり。病猪之也。病とハ、瘉手を負たるをいふ。

○万葉集巻十六ニ事之有者小泊瀬山乃石城尓毛隠者共尓莫思吾背。巻七ニ狂言香逆言哉隠口乃泊瀬山尓廬為云益[illegible]。口ク奥城とは[illegible]。[illegible]を云べし。[illegible]隠國下樋國といへる[illegible]下樋ハ下部[illegible]の[illegible]祭[illegible]也。

六年春二月壬子朔乙卯。天皇遊于泊瀬小野観山野之体勢慨然興感歌曰。

挙暮利矩能。隠城之也。[illegible]万葉集巻四[illegible]

播都制能野磨播。泊瀬乃山者也。

伊底挖智能。出立之也。

與盧斯企夜磨。宜山也。[illegible]万葉巻一ニ取與呂布天乃香具山。[illegible]山の形の足り[illegible]。又同巻十三ニ隠来之長谷之山青幡之忍坂山者走出之宜山之出立之妙山叙[illegible]

和斯里底能。走出之也。和斯里ハ上[illegible]和志勢和志と同[illegible]

[illegible]

○早とハ[illegible]のみ[illegible]石[illegible]万葉集[illegible]之金水之水能早敷[illegible]八[illegible]

[illegible]

與盧斯企野磨能。宜山之也。

挙暮利矩能。

播都制能夜麻播。註如上。

阿野儞阿野儞宇羅虞波斯。文尓心細也。文ハ阿[illegible]万葉集巻十三ニ朝日奈須目細毛暮日奈須浦細毛[illegible]心細[illegible]

阿野儞宇羅虞波斯。註如上。

[illegible]再[illegible]女の容貌の[illegible]妃[illegible]興感と有ハ[illegible]山の形[illegible]隠城[illegible]墓[illegible]

於是名小野曰道小野。とぶの山と愛しみなるくがまよ道の
二武智式。淵家かやさよ
小野とハ名づけるもや。
又名字のあるぞ。考ふべし。
十二年冬十月癸酉朔。壬午。天皇命木
工闘鶏御田始起樓閣。於是御田。登樓
疾走四方有若飛行時有伊勢采女。仰
観樓上怪彼疾行顛仆於庭覆所擎饌。
天皇便疑御田奸其采女。自念将刑。而
付物部。時秦酒公侍坐。欲以琴聲使悟

○かけとハ琴といふ
ハ発語也。

於天皇横琴弾曰。
柯武柯嚥能。神風之也。伊勢能。伊勢之也。伊勢の國のといふ
如上註。ゑりてまづい勢のといひく。伊制能故能 伊勢之子也。故略す
次なるの伊勢の某といふなるべきなり。
まゝハ三字重複術なるや。あし。
奴とられだ野の中しあらへど聖よ業えといふなれ。あるべくもあゝ浮八決
て奴ハ坂の語とおもひへ。私々ほつ。伊勢の采女をいふ也。
沙柯曳鳴 栄乎也。古事記の歌に阿佐比能恵美佐迦延伎弖。万葉巻十三に作楽花左可遥越貴所どある依の延まで。伊勢の采
女がおのく 伊褭甫流柯枳底 五百経懸而也。五百世經まで
盛りあるを云。 志我都矩屢麻 も少女の盛よあらんと言よ
掛くといふ也。掛とも祝詞宣命に掛巻毛恐幾万
葉巻十四に妹が名かけて。ちとあるも皆云に掛るや。
泥儞。其之盡迄尓也。五百世經ゝほどその采女の艶色も衰盡るまでと
いふ。かぎり無きをいふ也。色を所としし。以下も御田が事を

いへるも其之とはいふ事なり志我とは語なるべし既に上にいへるごとし。
飫裒枳瀰你。大君尓也當代天皇をさしまをす言なり
ハ既に上にいへるごとし。柯枸倶都柯倍。堅固仕へ也。摩都羅武騰。奉登也まつらむといふ
ハ上にいへるをさしていふ。堅仕奉るハ楼閣を動きなく堅く造りて仕奉るといふ
むかしハ御門に忠勤を尽すのいふなるをいふなり。楼閣を造るを仕奉ると
いへるにいひかけたり。延喜式祝詞に天乃御蔭日乃御蔭止仕奉氐。倭我
ともかくも御殿を造るといふ云。あれが下の勝ハそれの意の事也。
伊能致謀。我命毛也。さの毛助語なり。上五百經ハ伊那我倶母
努の采女なるにかけて驚せる意と見ゆ。
鷄騰。長毛欲得登也。命ながくあれと長くしてがな。楼閣によりて大君に仕奉りて楼閣をも造成へるものとや。伊比志枸倶
弥皤夜。言志工波耶也。工ハ都鷄の工とさしたる波耶ハ。阿枸羅陁
倶彌皤夜。惜工波耶也。あはれなる事にて又いふのえのハいふなるべしといふなり。
良斯登許曾云云。同仁德紀に。河多良須賀波良の事なり。神代紀に埋溝者地矣阿多

於是天皇悟琴聲而赦其罪。
もとより今の意にもなつかしといふ意を惜くはあらねど今ハ刑されんや老翁と思しめし、哀みの意をやなしたまふなり。
十三年春三月狹穗彥玄孫。齒田根命。
竊姧采女山邊小嶋子。天皇聞以齒田
根命收付於物部目大連而使責讓。齒
田根命。以馬八匹大刀八口被除罪過。
既而歌曰。
耶麼能謎能。山邊之也采女の氏也。姓氏錄云。山邊公ハ和氣
朝臣同祖大鐸石和居命之後也。といへるなり。
故思

摩古喩衛爾。小嶋子故尓也。小嶋子ハ采女の名なるべし。比登泥羅賦。人衒也。万葉巻十八に、波利夫久路於婢都気奈我良佐刀其等迩天良佐比安流気騰比登毛登賀米授とよめり。衒の字の意也。衒ハ字書に自矜也と註せり。

宇麼能耶都都擬播。馬之八疋者也。つぎとハ木の子之一木とつゞきて、即次ぞの意とおもへバ、この耶都擬も八次第なるべし。その負数を次第するよし也。鳴思稽矩謀那斯。惜無也。きえもなく……とのかく。上部武紀の歌にみえたる。……吾愛も……騁なる。自慢の馬の八疋をあはれと……

秋九月木工猪名部真根。以石為質。揮斧削材。終日削之。不誤傷刃。天皇遊詣其所。而怪問曰。恒不誤中石耶。真根答曰。竟不誤矣。乃喚集采女。使脱衣裙。而著犢鼻。露所相撲。於是真根暫停。仰視而削。不覚手誤傷刃。天皇因嘖讓曰。何処奴。不畏朕。用不貞心。妄輙答。仍付物部。使刑於野。爰有同伴巧者。歎惜真根。而作歌曰。

婀拖羅斯枳。惜也。如上註。偉儺謎能陀倶弥。為奈部之工也。

猪奈部ハ。真根が氏なり。姓氏録。未定雑姓。摂津國。條に。為奈部首。伊香我色乎命六世孫。金連之後也と見えたり。柯該志須

弥灘皤ハ。所懸墨縄也。和名抄云。内典云。端直不曲喩如縄墨。涅槃経文。墨縄和名須美奈波。とあり。万葉巻十一に墨縄哀幡倍多留期等久。巻十一斐太人乃打墨縄之。云々。墨縄をうくとぞ。今の世も書きちらしといふ気あり。旨我那謺摩。其之亡有者也。かくれども。あるのらぞといふ。首脳ふるや。旨我とハ。直根をさしてあればとのするならん八上の言せり。抱例柯柯該武豫。誰欲将懸。與也。與ハ你の字。捨つる與なりと。

婀抱羅須瀰儺皤。惜墨縄也。真根が亡有者かゝる墨縄をこれうつることのあらじとぞ。其の上巧なるを惜しむあらしみなりぞや。

天皇聞是歌。反生悔情。喟然頽歎曰。幾失人哉。乃以赦使乗於甲斐黒駒馳詣刑所止而赦之。用解徽纏復作歌曰。

農播抱磨能。寐程也。寐ると来ることばなり。一説に磐ハ。おもふの例多くし。八寉の青本歌の来経りて。得せらつ云のよし。八万葉巻三に記すあり。旅(?)に(?)結びぬ。中ちの家にゆるにと。雲歌にかゝる寐語ありて。さ(?)のみやこ(?)八寢の般(?)沖が説に。一云につゞきぬるなり。

黒駒ハ。八万葉巻四。巻十三に。夜干玉之黒馬之来夜者とあるを。今緑ゆ海と。ある出て。の絶よりとちて。ぬばたまの假名に用ひるのみ。まで烏玉ハ下に来る歌にかけつけてたゞ十三巻に烏玉。つゞけしなる。柯彼能矩盧古磨。

黒駒に乗ありよりて。ふるとつゞけるものなり。甲斐之黒駒也。甲斐ハ良馬をまれにいだす。延喜馬寮式の御牧にも。甲斐國。柏前牧。真衣野牧。穂坂牧を第一とし。同雑式の牧監にも。甲斐國を第一とせり。

矩羅枳制播。鞍着者也。伊能致志儺磨志。命將死也。柯彼能倶盧古。

置間も遅滞なりし。真根ハ刑に逢ぬべし。急速々。到つきつべ。まきをもつて切てぞ白へし。

磨。甲斐之黒駒也。歌ノ中ニ云ル句を再ヒ云事ハ。甲斐の黒駒の逸足なるをあはれぶ也。あらし真根が命を。殺ぬべし。真根が刑を遁るゝを。偏ニ黒駒の力なればなり。阿怜黒駒哉と褒るや。第四句を読切りたるなり。甲斐の黒駒は死ぬるまでかけぬべしといふ意也。一本換ニ伊能致志儺磨志一而云ニ伊志柯孺阿羅摩志一伊不及有麻志也。上の伊ハ発語。下の麻志ハ助辞。不及將有の意なり。

二十三年秋七月辛丑朔。天皇寝疾不豫云云。是時征新羅將軍。吉備臣尾代。行至吉備國。過家後。所率五百蝦夷等。聞天皇崩。乃相謂之曰。領制吾國天皇既崩。時不可失也。乃相聚結。侵寇傍郡。

於是尾代。從家來會蝦夷於娑婆水門。合戰而射蝦夷等。或踊或伏。能避脱箭。終不可射。是以尾代空彈弓絃。於海濱上射死踊伏者二隊。二嚢之箭既盡。即喚船人索箭。船人恐而自退。尾代乃立弓執末而歌曰。

瀰致儞阿賦耶。於道遇哉也。是ハ尾代が。從家來會蝦夷於娑婆水門をいふ。娑婆ハ和名抄ニ周防國佐波郡ニ佐波郷見えたり。そこの水門なるべし。嗚之慮能古。尾代之子也。子ハ壯子の称。吉備臣が自称なり。阿毎

你挙曽。天上尓己也。古曽ハ助辭。枳挙曳孺阿羅毎。不所聞将有也。矩

儞々播。於國者也。天上よりむかへいへバちの下つ出雲なとる云。枳挙曳底那。将所聞也。古よみの武勇ふ

るゝのひゞき上まてもゆるぐほどめ。大八洲國内にきこえてむしと自慷慨せられ

なりでもとてぬといふを広きの名高也。既に上まゐらする利。

唱説自斬數人。更追至丹波國浦掛水門盡逼殺之。一本云。追至浦掛。遣人盡殺之。

第十五巻　弘計天皇。四首。顕宗天皇。

白髪天皇二年。冬十一月。播磨國司山部連先祖伊與来目部小楯於赤石郡

親辨新嘗供物。適會縮見屯倉首。縦賞新室以夜繼晝。尓乃天皇謂兄億計王曰。云云。屯倉首。謂小楯曰。僕見此秉燭者。貴人而賤己。先人而後己。恭敬撙節。退譲以明禮。可謂君子。於是小楯撫絃。命秉燭者曰。起儛。於是兄弟相譲久而不起。小楯嘖之曰。何為太遅。速起儛之。億計王起儛。既了。天皇次起自整衣帯

為室壽曰。築立稚室葛根。築立は。新室を。城築達さるをいふ。稚は即ちひと訓べき也。賞新室云々と。上にも出たりて知るべし。萬葉巻十一に。新室乃壁艸苅ニ御座給根云云。とよめるも見つ。葛根は。延喜大殿祭祝詞に。下津綱根。古語番縄之類。謂ハ波府虫乃禍無久。とある所説に云。顕宗紀の。室賀の御詞。神代紀の大己貴命の宮のわ。御書紀の栴縄の詞等を合わせて。上つ代の繋造ては。上下縦横に千尋の綱をもて。結固しを。葛根の根は結固を云といへり。祝詞考にいはれしきとし。 築立柱楹者。

此家長御心之鎮也。柱楹の二字を合して。はしらと訓べし。和名抄云。説文云。柱。音注。和名波之良。功程式云。柬柱。豆賀。楹也。唐韻云。楹。音盈。柱也。とあるも。長は。家主をいふ。師えだぎみと訓ましも。萬葉巻五に。五十戸良と出たり。也とをと訓し。俗をあれば家を治と訓べし。築立る柱は。動きなきをほぎたるなり。 取擧棟梁者此家長御心之林也。棟梁の二字を合してうつばりとよむべし。和名抄云。唐韻云。梁。音良。和名宇都波利。棟梁也。とみえたる。梁の事

く繋ぎとめて。人の命の長きを。あげての多をほぎたるなり。 取置椽橑者此家長御心之齊也。椽橑の二字を合して。たるきと訓べし。和名抄云。橑。音老。和名太流木。揚氏漢語抄云。波伊岐。在檐傍下垂也。兼名苑云。一名橑。音老。一名椽。音傳。間扨。唐韻音人。漢語抄に。間扨。太流木。とあるも。椽を取置とほぎたるなり。あるべし。これよ蘆萑をもむすびつけたる家長の心の齊とほぎたるなり。

蘆萑者此家長御心之平也。蘆萑此云哀都利。和名抄云。楊氏漢語抄云。筏。。日本紀私記云。蘆萑。和名同上。今按唐韻云。萑。設官ノ反草也。為筏非也。とあるも吾郷のまつ奈胡と称ふの色や。彼椽へ横に結つけるをいふなり。齊るがゆゑに。心の平也と。ほぎたるなり。 取結縄葛者此家長御壽之堅也。縄葛の二字。つなねとよむべし。上の葛根也。是によりて結固めしめしを。御いのちのかためと。ほぎたるなり。

取葺草葉者此家長御富之餘也。かやは。萱州の名。

○万葉巻十四に…一蘇（あと音）
…依…よみつゝ…雲…
…雲の…

○柯倭也の也ハ古本に
…といへり…
助語…
…

の菅小の松下まで菅根
をもち御饗のと…
出雲者新墾。この出雲ハ…
…はじめて…新墾の…万葉巻十八…
…の…雲隠…登…
…隠…はぢ…りや…張弘…
…
新墾之十
握稲之穂。新墾…
稲…稲穂の長き…十束
といへる也。その茂穂の稲
…
於浅甕醸酒
和名抄云。本朝式云。
…佐良気今按辨色
立成云浅甕…和名同上…浅…
…醸酒ハ酒を…
…
美飲喫哉
美飲喫哉。此云于麻羅爾烏野羅甫屡柯倭也
可美也。…飲遣也…
…神遊…

万葉巻三の
吾子等。子ハ男子の通称也…
脚日木此傍山。上…
…発語や…此云…
牡鹿之角。牡鹿此云左鳴子加。万葉集…
…僞ハ假字下…比羅方…
…志加…牡鹿雄鹿男鹿…
…鹿一…
…志加…麦鹿…
…
擧而吾儛者
…
旨酒餌香市
…旨酒ハ発語。餌香ハ恵區之の…
…恵區之ハ古事記…笑酒…上宗神紀…
…
酒鈴鹿と…嘬酒…倭姫世記…
の…せし…餌香ハ続日本紀神護景雲三年…

○陵の事ハ古き書にも市とよめるハ、もの英加(アガ)の市なるべし。

○百足なる打上佐保(ウチアゲサホ)とつげし宴語もありて、おほかたそのものいひてきこえ。

市司(イチノツカサ)とあり。延紀に河内國といふ條に、河内國に恵賀(エガ)長野(ナガ)陵あれバしるすに、やあらんされど播磨の國にも、河内といふ郷の名なきにしもあらず。さるハ和名抄に國名餝磨郡の郷名に英賀(アガ)を英賀加とあるなれば、その市にてあらんや。

不以(モテ)直(アタヒ)買(カハ)ハ十握稲(トツカイネ)を浅甕(サラケ)に醸る酒なれバ、市に賣る酒にもあらず、と稱(ホメ)たるものなりて。

手掌(タナソコ)摎亮(モヤララ)に。手掌摎亮此云陀那則舉謀那羅々儞(タナソコモヤララニ)。一本則を封とす。いづれかよからん。さるハおとろといふなし。池の底とはひとつの摎亮を仁徳紀に寥亮をほやくの訓と、さかし摎と寥と音の通へバ、ほやうの鳴りひびきて下なる弦にいふ事や。その事のかたちの明らかに、寥亮ハ歌語也。今本に訓るハやらゝとあり。那ら耶と字書の似たれば、寥亮ハ和ら(ヤワラ)かなるべし。されば下の拍上(ウチアゲ)をいふも拍手の事なり。

拍上(ウチアゲ)賜(タマヘラ)。打上(ウチアゲ)ハ宴の名にいふ事も、うちあげの酒宴の語也。竹取物語にも三日うちあげあそぶ。うつほ物語、蔵開の巻に七日あそびなど、よのありしてうちあげあそぶといひ、今津保物語にも…

伊(イ)儺(ナ)武(ム)斯(シ)盧(ロ)。寐席(イナムシロ)也。是よかる発語にて、師の冠辞考にいはれしも、むしろ八十代也。加(カ)皤(ハ)泝(ツ)比(ヒ)野(ヤ)儺(ナ)擬(キ)。河副柳也。河ぞひの柳なりとも。寐(ミ)逗(ズ)愈(ユ)凱(ケ)磨(バ)。水行者也。儺(ナ)弭(ビ)企(キ)於(オ)己(キ)拖(タ)智(チ)。靡起立也。是と(ビ)ハ歌にもおなじ。曾(ソ)能(ノ)泥(ネ)播(ハ)宇(ウ)世(セ)儒(ズ)。其根不失也。河ぞひの柳の水にさからひて靡伏ども、その水の干る時ハ起立て、その根の流せ失ぬがごとく、世の乱るとも、隠伏(カクレフス)ものとも、終ハまた世の太平にならバ、時をえて起立なりとのことを比喩して、からひなりとも。

くるとのつとられるに、彼(カノ)あはれ、これもきこえて或人云て。吾(ワカ)常(トコ)世(ヨ)等(タチ)。常世とハ、ことごとくかくなりて上り、吾等(アコタチ)をも寿へる人をさすなるべし。今ハ寿(トコ)世(ヨ)等(タチ)とし、寿(オギ)をかくるなし。壽(ホギ)畢(スリテ)乃(チ)起(タチ)節(テ)歌(ウタヒテ)曰(タマハク)。

小(ヲ)楯(タテ)謂(イヒ)之曰、可(オモシロ)怜(シ)。願(ネガハクハ)復(マタ)聞(キカナ)之(ム)。天皇遂(ツヒニ)作(ミマヒ)…

殊儛。殊儛、古謂之立出儛。立出此云陀豆々儛。儛状者乍起乍居而儛。〔釈紀〕云。養老私記云。舞状者。乍立乍居而儛。今東舞是也云々。

詰之曰。倭者彼彼茅原。浅茅原弟日僕是也。

この御言を詳にすべてしらねどさし詰ていふべし。倭者とは郡の名にて皇胤の事なり。大和國のあるじにまします御子なればなるべし。彼らハ契沖が説に舊事紀に曾し笠縫等祖云々とある笠縫と同じく、地名にて侍ると。曾々彼無えといへるがごとく。是は延喜式大和國添上郡に取荷外乃曾々彼無といふ所あれど、おぼつかなし。茅或ハ菅の数の茅の立てる所をいふなるべし。笠縫とも。ここは浅茅の生ひたる所をいふ。兄弟の王の並居る所にて、兄の茅の弟日僕とハ郡の名にて、万葉集巻二に霰打あられ松原弟日娘子と云へればあるなるべし。あしき松原ハ肥前風土記に、弟日姫子といへる女を云、と書ける。兄弟の並居るの由にておぼえ給ひしなり。記に、弟日姫といへる女を、或は書紀に弟日の名をそへて申すは、弟日とは八人の兄弟の中の弟なりといへるも、篠原の僕なりといふことなるべし。若しかくいはば兄弟をおとしめいふ意にて、僕ハ郡の者に云ひたる僕のごとく勅語なるべし。かくて段を尽して家などいへるに同じ。謙りて僕とハ郡を申すなるべし。

小楯由是深奇異焉。更使唱之天皇詰之曰。石上振之神榲。

榲此云須擬。石上ハ大和國山辺郡也。振ハ神宮のある所なり。上つ代の書にも多く見えたり。石上振とつづけて、此の御言をはじめて武烈紀の御歌にもいはれたる。石上振の神杉ともしるせるとぞ思ひ侍る。所の神杉をしもいへるにて、かくいふなり。契沖が説に、石上神宮にまします彼の布都御魂のことをいへり。父のまします磐坂市辺押歯王をさしていひて、かく説なるべし。石上振の神杉のごとく、磐坂市辺をいひて地を撰してかくいふなり。振の

伐本截末。

伐本截末。此云謀登岐利須衛於茲婆羅比。延喜式大殿祭祝詞に、斎部の伊都伎の五十橿山三尾之竹矣本詞岐末押磑延。小峡爾立留木乎本末乎山神爾祭氐。大殿祭祝詞にも天津菅曾乎本苅断末苅断。云々。かくある詞の類なるを、かへていへるなり。さても本末を断つの義にて、かくいふ例の詞なるべし。かくて押歯王の御事を申す。父の押歯王の御子にて本末を切りて、その事をいへるなれども、あるべし。

まそかくて謀りける也。仲臣等を殺すこと。伐本といひ。阿曇連浜子を捉ること截末といふ。まことにあらはるる也。ちの文を。能よく考ふべし。然則

於市辺宮治天下。此紀の末に。吾父先王雖是天子之子遭遇迍邅不登天位と見えたれば。治天下とは記すべからざるを。此は風のまま残掲称へるにて。かくまで書きたれば雄略紀に。天皇恨穴穂天皇曾欲以市辺押磐皇子伝国而遥付嘱後事と見えたれども。儲君としては摂政のひとなり。なる故にかく治天下とは記したるなり。

天萬国萬押磐尊

萬と上に称へるがめでたし。足備はるをいふなれば。天足国足といふにおなじ。顕宗紀に。御寿は常に天足有と見え。寿は齢をいふ。天足は長くして。長き事もいふなり。かくてちよろづの寿を書きけるも。されたるを。崇められるとおなじ。

御裔僕是也。小楯

大驚離席悵然再拝云云。

五年春正月。白髪天皇崩。是月皇太子億計王與天皇譲位久而不処。由是天皇姉飯豊青皇女。於忍海角刺宮臨朝秉政。自称忍海飯豊青尊。当世詞人歌曰。

野麻登陛爾。大和方に也。古事記仁徳條。黒媛のおよみ。夜麻登幣邇 斯布岐阿宜氏云云。万葉よみ。沖つ島辺。都辺など皆方へといふなり也。

彌我保指母能婆。見之欲物者也。

於尸農彌能。忍之海之也。乃字を紛めく。如といふなり。忍海は。大和の郡名也。紀に葛城忍海之高木角刺宮とあり。忍海は今も葛城の内ちあるを思ふべし。

莒能陀哿紀儺屡。此高城在也。城とは。稲城磯城の城をいふ。垣など結めぐらし一郭となせるをいふなり。

くぬと取闕るゝをいふ云や。古事記に仁徳條のうたに、こもりこも能曾能多迦紀那流とあるも同じ。神武紀の歌にみえたるも、たかきは田城なり。急とは更に異なるし。

都怒婆之能瀰野。角刺之宮也。青尊の大宮ゐの名也。その宮室の美麗を稱たる歌なるべし。

冬十一月。飯豊青尊崩。葬葛城埴口丘陵。

さてもこの青尊は天皇の大にかゝる御の数に入まじくおもへど、いかゞこの紀にも古事記にも然れたるも多し。神皇正統記凡例曰。飯豊天皇女帝称天皇載其治一年於清寧後者皇代略曰。飯豊天皇不註諸王系圖。和銅五年上奏日本紀載之然續日本紀和銅五年無載其事。前王廟陵記曰。今按和銅五年上奏日本紀載之。此日本紀者非今日本紀者。相後和銅五年九年。養老四年奏覧焉。云云。此所謂日本紀今亡非傳。不可得考。然水鏡海道諸國記並載此帝即位。称以飯豊天皇而標之歴代。為二十四代。無窮記亦載之歴代。愚管抄。神皇正統録。称之飯豊天皇。本朝編年録。國史実録等清寧之後附飯豊天皇治世一年。皆可證也。故擬之といへり。さらば青尊崩とかける。尊の字も崩の字もあまたかゝれたるも、あながちにあらず。

元年二月戊戌朔壬寅。詔曰。先王遭多難殞命荒郊。朕在幼年亡逃自匿。猥遇求迎升纂大業。廣求御骨莫能知者。詔畢與皇太子億計泣哭憤惋不能自勝。是月召聚耆宿。天皇親歴問。有一老嫗進曰。置目知御骨埋處。請以奉示。置目老嫗名也。近江國狭々城山君祖倭俗宿祢妹。名曰置目。見下文。於是天皇與皇太子億計将老嫗婦奉于近江國來田綿蚊屋野中。

堀出而見。果如婦語。詔老嫗置居于宮傍近處。優崇賜卹。使無乏少。是月詔曰。老嫗伶俜羸弱不便行歩。宜張繩引絙扶而出入。繩端懸鐸。無勞謁者。入則鳴之。朕知汝到。於是老嫗奉詔鳴鐸而進。天皇遙聞鐸聲歌曰。

阿佐賊籔囉 浅茅原也。延佳神主古事記頭註曰。按此歌自第一句至第三句。皆言鐸鈴聲過山野因起鐸動之語。といへるハ式説是とすべし。いろのおもひくも浅茅原ハ鳴曽祢にかゝれる發語なら得ぞ。山野をさるて残りいへるにハあらず。

鳴曽禰 鳴須擬 古事記にハ遠延尓とかゝれ。小谷なるべくおもひゐる所なり。さて考るに曽袮といふ地名の。示さるゝ所あるがおほかるハ。嶺根なるべくまた嶺を称ふハ河川につゞきて云。云すれバ。小谷と小曽袮ハやゝをさき称なれバよく考ふべし。

謨々逗抱甫 百道傳也。知道の絶逗なり。て知の云を省きたるや。おほくの道路を傳ひ傳ふるにつゞけたるや。ぞのほかの紀の神功紀の百傳度會縣ハ百道を傳渡るといふ意につゞけたるや。應神紀の條毛々逗多布都怒賀ハ。又ハ云にかゝれるべく。万葉集巻三に磐余池につゞけたる百道傳ふるも。山も谷も岩根も有めれバ。岩根の意につゞけたる云ともすべし。称と統ハ同義。又同巻七。巻九に。八十之嶋廻につゞけたるも。おほくの嶋々を傳ひ廻りをいふがゆゑにて。ちかゝるハ。怒道の意道をもとりとゆへ垣ほ長手のごとく。今の世縄とよふものと同じものにて。

怒底喩羅倶慕與 鐸響毛與也。鐸ハ私記云。如今鐸傳之鈴と記されたり。上にいふ如く多くの路山を路る名もて。野手のおもハ上にいふ道の意のいまだあらざる。卯ゆの字の義よりて云なすべし。とあるべくやしおもへれどもよく考れば。百傳の發語のかゝれるにも。徒る意のいろく。鐸の名ハ瓔手にまとて宥べく。それ上に見えたる統。脚帶の小鈴。仲皇后紀手鈴を足玉手玉とよぶもの。とおさハ統。神

代紀の瓊響瑲々をとられめてゆらくといふ意しつらしくなりて万葉集巻十一によ
玉なるはもとあるを即玉の緒なるべくなれど大かたは緒といふなるの意。玉は鐲
迄るゝ響をいふなりやしおきへて。今の緒ハ後に漢土より渡来りしこのうさしはなきといへるハ然るにや。万葉巻三に竹玉
手纏ニ貫無ハ緒なるも今の世古墳より堀出る玉に管玉の多くあるハその形を
なしておきつるに弁玉を小竹をつらぬいて切りたる多くあるべしその小竹を
篶竹といふも緒と玉とハ切つらの物を申しおほよそ由れ緒ものすハ弁玉の考
にあらしくい緒をゆらくゆらくなり。上に引神代紀瓊響瑲々は剰語に乎奴儺等母
母由羅尓とあるを紙師說云乎ハ緒也奴ハ瓊也同音なる故通へり。儺ハ之也等ハ音
の語を省くなり。母ハ辭也次なる母ハ真也由羅ハすべて玉のお觸まて鳴響を
云でなまても。由須の約も由留の約も由也羅ハ由羅具とも云。羅久の約
留なるをとりて辭とれかくまて由羅ハを搖こすなるを搖ハお觸く鳴るもい
ひて搖ともかくてちらの九くハ緒瓊之音毛真搖尓とみるべしと紙師。さに
てちくの云も。於岐毎倶羅之慕 置目來良斯毛也鐸の響を聞
ゆなりなり。しめらく置目の來るを知し
めせるや置目といふ名ハ押歯王の御骨を求めへありしかの老嫗の見置しを
失ハざらしその地を知れるを譽て名を置目と賜へりと古事記にみえたるなり。

目ハ刈えのよしなり。

二年九月置目老困乞還曰氣力衰邁老耄虚羸要假扶縄不能進歩願歸桑梓以送厥終天皇聞惻痛賜物千段逆傷岐路重感難期乃賜歌曰

於岐毎慕與 置目毛與也毛與ハ助語万葉巻一に籠毛與布久志毛與とあり。古事記には意岐米母夜とあれやとあるハおきめとも。淡海之置目也そは近江國の産なれば也。奥からつくる意なりとも。

阿甫彌能於岐毎 阿甫彌の上に云へる如ゝ。

阿須用利簸 自明日者也。がいつるハ穿てをも。

彌野磨我倶利底

真山隠而也隠をかくれとハ體言にいひて古言也。大和の國 彌曳孺賀

とき。近江より山路を隔てかよひしをの多波帰利。

謨阿羅牟。不見哉將有也。續古今集の詞書に古のなか哉ハ栽られたりし

波也。この歌をとり見るによりてみやこかくれてありしかバも

あらたなしと思られしに、いみじき題のおもしろや。中古ハ先達いはでかくまで

古歌を解ながら古書を讀しもなかりけるよし。

日本紀歌解槻乃落葉中巻 終